令和元年度 産官学連携による観光産業の中核人材育成・強化事業

体験型観光商品を企画・実施できる中核人材の育成を目指す

体験型観光商品企画担当者向けセミナー

報告書

青森大学 観光文化研究センター

青森大学 AOMORI UNIVERSITY
国土交通省 観光庁

CONTENTS
目次

はじめに ・・・ 2

実施概要・広報 ・・・ 3

TERM 1　青い森の蒼い湖と碧い海を巡るツアー ・・・ 5

TERM 2 “縄文アートスケープ”青い森の力いただきます ・・・ 14

TERM 3　青森の雪満喫プログラム！ ・・・ 37

TERM 4 “Share Aomori”青森の冬の魅力紹介します ・・・ 45

掲載記事 ・・・ 59

青森の自然体験型観光における現状の課題と今後の展望 統括 ・・・ 60

はじめに

平成29年度より観光庁から「産学連携による観光産業の中核人材育成・強化事業」を受託して取り組んできました。1年目は〝実践から学ぶ観光産業改革の手法〟をテーマに、主に宿泊産業の従事する次世代経営者や幹部職員を対象にした宿泊産業の魅力創出や経営効率化を通じた生産性の向上、さらにインバウンドへの取り組み方を学び経営の安定を図ることを軸に展開しました。2年目は〝実践から学ぶ自然環境資源を活かす体験型観光商品の開発手法〟をテーマに、観光資源としての自然環境資源にスポットをあてて青森の観光産業の新たな可能性を探り、体験型観光にあらたに取り組む為の素材の掘り起こしと先進的にとり組んでいる事例からその観光商品開発の手法を考えました。

そして3年目の今年度は、さらに、青森県の観光資源のポテンシャルとして、前年度に引き続き**〝自然資源〟**に新たに**〝文化資源〟**の視点も加えました。何れにしても自然由来の観光資源を体験型観光商品として開発する為の試みでした。

全４回の講座の企画と構成、そして実施は、前年度に講師として関わっていただいた地元で自然体験型観光商品を展開している事業経営者の方々と協働で取り組みました。さらに新たに縄文文化、自然由来の暮らし、森、野草、食や健康、薬草の視点を取り入れ、青森大学薬学部の大越先生をはじめそれぞれの専門の方々を講師として招き展開しました。これらは昨年に引き続きインバウンド対応も課題とし、外国人観光客に青森の自然と文化を体験してもらう、アクティブな自然体験と自然由来の歴史・文化・食などの文化体験を意識したものでした。そして、最後の第４タームでは、青森大学留学生と日本人学生が協働して母国の大切な人に青森の自然と文化を伝えるPR動画を制作する講座を展開しました。

観光産業を取り巻く現状で、観光庁が発表した宿泊旅行統計調査によると、青森県の2017年インバウンドの宿泊数の伸び率が全国１位を記録しています。観光庁観光資源課が2019年3月に発表した報告によると、全世界の自然体験型観光商品のニーズが増加し、市場規模が2016年で49兆円、2023年には147兆円まで拡大すると予測されています。外国人の訪日時に自然体験型観光の需要が大きいと指摘しています。

このような状況を受け、今後青森県では、国立公園を含め山、湖、渓流、海をフィールドにした自然体験型観光商品の開発と展開に可能性があります。観光産業の課題を解決し、地域の自然資源を活用した観光で地域を元気にすることが課題です。

令和2年3月

青森大学 観光文化研究センター
センター長 佐々木 豊志

体験型観光商品企画担当者向けセミナー実施概要

近年の観光産業の変化、特に体験型観光のニーズと急増する外国人観光客の対応のために自然体験型観光商品を展開する企画者・実施者のための講座を実施。事業を展開するための事業組織、ガイド育成、観光業関連施設や交通機関、メディア広報等をつなぎ、青森の地域資源を活かした自然体験型観光産業の未来志向の企画者を育成するため、以下の４つタームにて体験セミナーを展開しました。

TERM 1

【第1ターム】青い森の蒼い湖と碧い海を巡るツアー

2019年9月25日（水）～27日（金）2泊3日

十和田湖・奥入瀬渓流・浅虫。青森の自然豊かなエリアを巡回する水と共にアクティビティを通して体感し、観光商品としての可能性を企画に活かす。

公共交通機関とサイクリングで繋ぐ青森体感ツアー。アウトドア初心者でも安心して参加できるよう配慮したプログラム。

「水」をテーマに各所の湧水を汲みながら、山から海へと水を追い駆ける。

【会場】十和田湖・奥入瀬・浅虫

【定員】10名【受講料】10,000円【食費・宿泊費】10,000円

【講師】・村上周平　十和田湖ガイドハウス櫂
・木滝奈央　潮風アウトドアガイド協会
・盛健一　4-Ride
・花田カズオ　BBB Aomori Tour Guides

TERM 2

【第2ターム】“縄文アートスケープ”青い森の力いただきます
～縄文スピリットが今の暮らしに響きだす～

2019年10月12日（土）～14日（月）2泊3日

サスティナブル・ヘルスツーリズムを通じて、環境意識・健康意識を喚起する体験型コンテンツの可能性を探る。森をテーマにし、自然由来の素材を活かした体験プログラムの商品企画・実践しうる人材を育成する。

縄文から伝わる先人の知恵を識り、体験する。森を歩きながら、自生する植物を感じ、衣・食・住・医に用いられていた文化（効能・味覚等）を体験する。

【会場】青森大学ヒュッテ

【定員】20名【受講料】10,000円【食費・宿泊費】10,000円

【講師】・大越絵実加　青森大学薬学部准教授・SDGs研究センター
・児玉大成　青森市教育委員会事務局文化財課 文化財保護チームリーダー
・玉熊恭子　チキサニの森・NPO法人青森県樹木医会
・楠本ゆり　NPO法人くりこま高原 地球の暮らしと自然教育研究所

TERM 3

【第3ターム】青森の雪満喫プログラム！

2019年12月14（土）～15日（日）1泊2日

青森の冬の厳しい気象環境が創り出す非日常空間を、いかに安全なエンターテインメントに仕上げるか。新しいアイデアを取り入れた体験プログラムを考える。

世界屈指の豪雪地帯でアクティビティの楽しさと冬山の美しさを体験し、その中に潜む危険性を学ぶ。

【会場】酸ヶ湯温泉周辺

【定員】10名【受講料】7,000円【食費・宿泊費】 5,500 税別～

【講師】・其田知志　八甲田山酸ケ湯ツアーガイド
・喜來大智　青森大学・自然サークルSDGs代表
・佐々木豊志　青森大学観光文化研究センター長

TERM
4

【第4ターム】“Share Aomori”青森の冬の魅力紹介します

2019年12月21日（土）～24日（火）3泊4日

青森大学留学生と講師と合同で、青森の観光インバウンド対応、及び留学生が自国へ青森の体験型商品をプロモーションする企画会議と映像制作を行う。

青森の冬・雪という自然資源活用を検討するため、留学生に冬のアクティビティを実際に体験してもらい、自ら自国へ紹介する内容を考え討議して広報コンテンツ制作をする。

【共催】青森大学国際交流センター
【会場】青森大学ヒュッテ キャンプ場～八甲田（酸ヶ湯温泉周辺）
【青森大学に在籍中の留学生】約10名
青森県を自国に伝えたい思いがあり、体験・討議・作業に積極的に参加できる学生
【講師】・花田カズオ　BBB AOMORI TOUR GUIDES
・其田知志　八甲田山酸ヶ湯ツアーガイド
・ミハイ・アポスト　青森大学非常勤講師/フリーランス
・佐々木豊志　青森大学観光文化研究センター長
・後藤欣司　モディ株式会社
・喜來大智　自然サークルSDGs
・戸澤依香子「あおもり和ハーブの会」副代表/和ハーブ協会インストラクター
・楠本ゆり NPO法人くりこま高原・地球の暮らしと自然教育研究所

チラシ表版

チラシ裏版

今年度事業は３年目を迎え、青森県の観光産業の新たな可能性として、自然体験型観光商品を展開する小規模事業者の支援と人材を育成すること見据えています。体験型観光商品を企画し、実施できる中核観光人材の育成を目指し、青森県国際観光戦略局が平成29年に立ち上げた「AOMORI MOBILTY チームAAA」のメンバーを中心にプログラム企画を行いました。

第１タームは**「青い森の蒼い湖と碧い湖を巡るツアー」**と題し、**〝水〟**をテーマに移動しながら各所の水を汲み、山から海へと水を辿り、十和田湖、奥入瀬渓流、浅虫・陸奥湾へと、カヌー体験、バイク体験、SUP体験と体験型の観光商品の可能性を探る観光企画を試みました。青森県に自然体験型観光が広がるためには、本事業の企画委員になっていただいたチームAAAのメンバーのような若い世代が自然体験型観光商品を事業化できる環境を整えること、そのために彼らと協働して取り組む機会を創出することが重要であるとの認識の上で進めました。

セミナーを通じて、
①青森県内の自然体験型観光事業の推進、発展のための仕組みづくり。
②自然体験型観光事業の企画者、実施者を育成し、次代を担う人材の育成。
以上の２点を意識してプログラムを実施、検討しました。
実施委員の方々がそれぞれ展開しているプログラムをお互いに共有したこと。これらをつなぐ、場の検討や関連協力施設（宿泊施設、飲食施設や観光価値がある施設・ポイント）を発掘し、つなげることで観光商品の価値が高まる可能性も感じるセミナーとなりました。

実施日：２０１９年９月２５日（水）～２７日（金）２泊３日

実施場所＆体験プログラム
1日目：十和田湖・カナディアンカヌー体験
　　宿泊：宇樽部キャンプ場・キャンプ料理
2日目：十和田湖～奥入瀬渓流・サイクリング体験
　　昼食：石窯ピザ・オルトラーナ
　　宿泊：温泉民宿南部屋
3日目：合浦公園～浅虫・サイクリング体験
　　昼食：古民家・アプリコット
　　サンセットビーチ浅虫～湯の島 SUP体験

以上のプログラムは、それぞれの事業者が連携したこれまでにない企画です。今後の展開の中で今回のように事業者同士がつなぐ・つながる役割が必要であることを共有できたことは、本セミナーの成果であると言えます。青森大学観光文化研究センターが青森県内の観光産業の人材育成の諸課題を解決していくという役割の一つにこのようなハブ機能があると認識できました。

1日目：十和田湖・カナディアンカヌー体験

講師
村上 周平 氏　Shuhei Murakami

Towadako Guidehouse 櫂
Canoe Guide / Nature Guide

北海道出身。ガイド暦16年。2008年に青森県十和田市に移住し、十和田湖の上質な自然に心惹かれ定住を決意する。
カナディアンカヌーと自然をこよなく愛するのんき男。
十和田湖で10年間ガイド業を行い2018年からTowadako Guidehouse 櫂のガイドとして活動を始める。
人と自然と未来をつなぐをコンセプトに「カヌー」×「自然」×「地域」の魅力と価値を伝えるべく十和田湖カヌーツアーやネイチャーランブリングツアーを催行してる。また、JSCA（日本セーフティーカヌーイング協会）の「公認カヌースクール」に加入しておりカヌー塾を開催しノウハウを伝えカヌー活動の普及にも力を入れている。

・メディック・ファーストエイドベーシックプラス（MFA）
・RAC / CONEリーダー
・JSCAカヌーインストラクター1
・JSCA SRP(セーフティ&レスキュー プログラム)講習認定
・JSCA公認カヌースクール TG櫂代表
・JSCA 正会員
・NPO法人奥入瀬自然観光資源研究会 運営委員
・MDO 代表

開会式

カヌー体験前の説明

十和田湖カナディアンカヌー体験

青い森の蒼い湖

講師

木滝 奈央 氏　Nao Kitaki

潮風アウトドアガイド協会

茨城県鹿嶋市出身。2010年に青森県三沢市に移住。Ogawarako Kayak LABOにてカヤックインストラクターとして３年勤務。現在は潮風アウトドアガイド協会に加入し、種差海岸でのガイドを目指す。また、BBQが盛んな三沢市を中心に講師としてBBQの楽しさとマナーを伝えるほか、キャンプツアーやアウトドアイベントで腕を振るっている。

・潮風アウトドアガイド協会 協会員
・RACリーダー
・JBBQAバーベキュー中級インストラクター
・青森県食品衛生責任者養成講習会 修了

地元産の食材をふんだんに使ったBBQ

宇樽部キャンプ場でのキャンプ料理

上：即席カヌーのようなズッキーニメニュー　　2日目の朝食
下：食後は焚き火を囲んで深夜まで熱い議論が展開

２日目：十和田湖～奥入瀬渓流・サイクリング体験

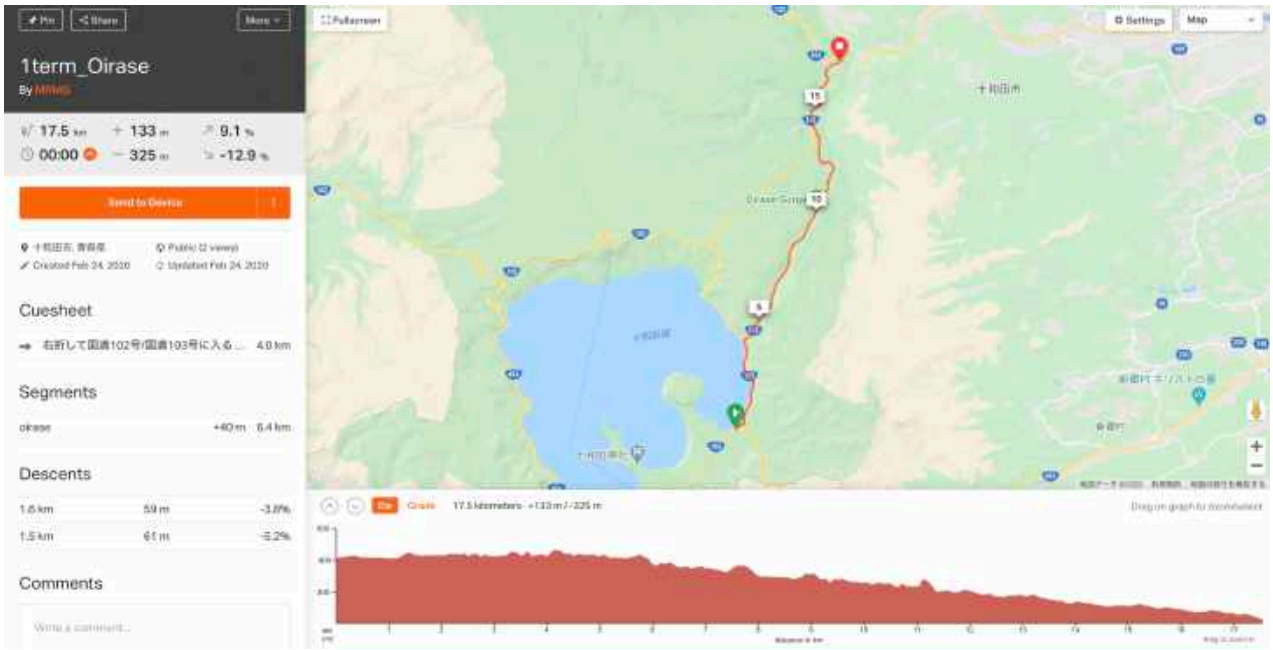
講師
花田 カズオ 氏　Kazuo Hanada

BBB Aomori Tour Guides

弘前市をベースにサイクリングツアーを企画運営しています。
トレッキングとサイクリング、カヌーとサイクリングなど
アクティビティのコンバインが人気です！

・JCA公認サイクリングガイドベーシック
・JCTAサイクルツアーガイド
・JMGA登山ガイドステージⅡ
・JMGAスキーガイドステージⅠ
・JSCAカヤックベーシックインストラクター

十和田湖～奥入瀬渓流サイクリングルート



[おすすめポイント] 14の滝と変化に富んだ流れが魅力

十和田湖～奥入瀬渓流サイクリング体験

表情豊かな奥入瀬渓流

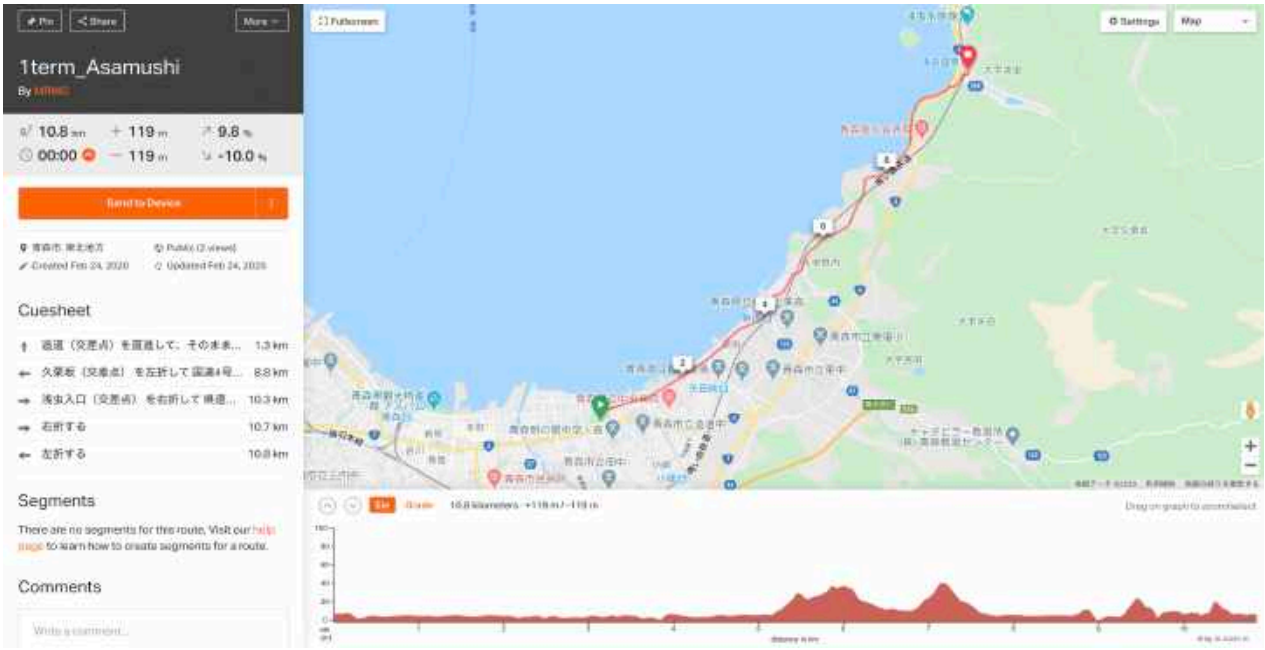
青い森の美しい自然

石窯ピザ・オルトラーナさんでランチ

3日目の朝：温泉民宿南部屋さんにて

3日目：合浦公園～サンセットビーチ浅虫サイクリング・SUP体験

合浦公園～浅虫サイクリングルート



［おすすめポイント］陸奥湾の奥懐から望む、津軽・下北 両半島の隙間に見える北海道

講師
盛 健一 氏　Kenichi Mori

4-Ride

青森県青森市出身。新潟大学大学院化学工学科卒業。
学生時代より約１５年ウィンドサーフィンに明け暮れる。
大学院を卒業後は、総合化学会社の電子材料開発のエンジニアとして、先進国から途上国の多くの企業の技術指導に携わる。２０１０年より、スキーメーカーである地元青森のブルーモリスに入社。現在は観光業を絡めた事業に携わり、四季を通じた青森の自然をより多くの人に楽しんでもらうための取り組みに励んでいる。

［SUP体験のおすすめポイント］
・年齢問わず誰でも簡単に乗りこなすことが可能
・海岸浴、海岸療法など心身ともにリフレッシュできる
・浅虫温泉街の対岸には、湯ノ島があり夕日、鳥居などインスタ映え

サンセットビーチ浅虫 SUP体験

どこまでも碧い海と空

サンセットビーチ浅虫

盛氏の説明を受ける SUP 初体験の参加者

浅虫（麻蒸）温泉の名の由来や文化に触れたり
青い森の豊かな湧き水を味わいました

昼食は古民家アプリコットさん

“水”をテーマに巡り各名水の淹れたて珈琲をいただきながらの閉会式

～青森の自然体験型観光における現状の課題と今後の展望１～

青森自然体験型観光DMO組織形成（想定）を目的とした、「現状の課題」と「今後の展望」について、課題の共有と共に今後の展望の模索と人材育成について、より具体的なアイディアと対策等を今後の展開に繋げます。

●村上 周平 氏　Towadako Guidehouse 櫂 Canoe Guide / Nature Guide

［現状の課題］
・第１ターンでは結束してからの準備期間があまりにも短く、お互いの連携や集客など様々な点で問題があったため、次回からは十分な準備期間が必要
・当組織を運営するにあたってのコストや人員をどう賄っていくか？
・人材育成後の業者受け入れがどれほどあるのか？

体験活動事業はNPOやボランティアなどを含めると数多く存在するものの、果たしてガイド業のみで成り立っている業者はどれほどあるのか？また、新規雇用できるところはあるのか？

［今後の展望］
〇個人として
・人材育成は非常に重要な位置付けと考えていて、個人事業者が行うよりも組織全体で取り組む方が、様々な学びができるので効率が良いから継続して行なっていきたい

・年に数回、組織間の連携やスキル強化のため研修を行いたい
・十和田湖ガイドハウス櫂が今年からうたるべキャンプ場の指定管理となりましたので研修等で利用しやすくなります

〇自然体験型観光業者全体として
・人材育成には様々な要素が必要なので、全体的な学びと専門分野に分けたカリキュラムが必要
・各分野の専門講師が必要なので、カヌー分野では、ラフティングやカヤックの新たなスタッフが必要
・県の体験型観光事業の代表として、各方面へのPR活動など積極的な広報活動を行なってほしい

●木滝 奈央 氏　潮風アウトドアガイド協会

［現状の課題］
・企画から実施まで余裕をもった準備期間
・ターゲットへ向けた効果的な周知、集客
・各事業者同士の連携
・取りまとめる窓口のような機関

［今後の展望］
〇個人として
・ガイドスキルと知識の向上

〇自然体験型観光業者全体として
・海外へのPRとインバウンド対応
・長期滞在向けのツアーの開発
・青森県を訪れ自然体験に関心を持っている顧客をとりこぼさない

～青森の自然体験型観光における現状の課題と今後の展望２～

●花田 カズオ 氏　BBB Aomori Tour Guides

[ガイディングする際に気をつけるポイント]
・お客様の安全を第一に考える
・常に周囲に気を配って、お客様を盛り上げる
　ただし、慎重な場面では毅然とした態度で注意を促す
・お客様（国内・海外問わず）の居住エリアや歴史文化と比較してご案内する

[今回の異業種ガイドと連携したツアーを通しての気づき]
・アクティビティを組み合わせることによって、ツアーのバリエーションを作れる
・青森への来訪動機につながると感じる
・お客様の滞在時間を長くすることができる

[受講者へのアドバイス]
・ガイディングとは、セーフティ・ホスピタリティー・エンターテインメント

[目指していること]
・プロフェッショナルなホスピタリティを、背伸びしない素朴なおもてなしで
　表現したい

●盛 健一 氏　4-Ride

[SUP体験させる際に気をつけるべきこと]
・風向き/風速/波/潮の流れなど気象状況を十分に配慮する必要あり
・体験者のレベルに合わせて体験およびツアーメニューを考える必要あり
・緊急時の救助マニュアル、体制作り　→　弊社は既に準備済み
・安全面など説明する上でも多言語化への対応が必須
・万が一の備えとして、体験者の保険加入
（事業者として金額に盛り込み対応すべき）
・参加承諾書への説明および必要事項の記入

[異業種ガイドと連携したツアーを通しての気づき]
・異業種ガイドならではの視点の違い
・1つのアクティビティでは物足りない部分も連携することで魅力が増える

[今後ガイドとして活動したいと考える参加者へのアドバイス]
・その地域および土着文化など幅広い知識を常に心がけ勉強が必要と思います
・ストーリー性を考慮した商品開発
・ガイドとしての振る舞いを意識する（常に見られていることを意識する）
・緊急事態対応への準備（常に先を見る、予測する能力を磨く）
・いかに深く地域住民／地域事業者と理解し合えることが重要

[目指している青森県観光]
・観光客が青森県内を自由に気軽に動けるような環境作り（シームレス化）
・地域が一体となり、様々な業種が連携した観光
（地域/ガイド/関わる業種が持続可能にしたい。理想ですが・・・）
・ガイド業務の品質均一化

TERM 2

“縄文アートスケープ” 青い森の力いただきます

第１タームに引き続き、2019年11月12日（土）～14日（月）に２泊３日で第２タームを実施しました。

今回は、**“縄文アートスケープ” 青い森の力いただきます** というテーマで、身近な環境や素材で実践できることにスポットを当てて、青い森から享受できる食や薬草、そして、青森の歴史・文化・風土からつながる縄文を素材に体験企画を試みました。縄文スピリットが今の暮らしに響き、体験型観光商品になる可能性の模索となりました。

初日は、モヤヒルズの青森大学ヒュッテを会場に次の３つの講座を展開しました。

講座1：青い森とともに(共・智・友)に活きる

講師

大越 絵実加 氏　Emika Ohkoshi

青森大学薬学部准教授
SDGs研究センター

博士（薬学）。薬剤師。
専門：天然物化学。
機能性食品の開発に携わった企業経験や米国ノースカロライナ州立大学チャペルヒル校勤務などを経て、現職に従事している。
青森大学「持続可能な開発目標（SDGs）」研究センターのプロジェクト「人・素材・地域 Material Production」として地域の文化・産品につながる取組みを学生とともに行っている。

青森大学薬学部准教授・SDGs研究センターの大越先生に登壇いただき、天然物化学の視点から、民間薬・漢方薬・生薬の違い、秘伝の漢方薬の作り方についてお話いただきました。青森に自生している葛・山椒・白樺などを中心に、１０種類の生薬の味覚や効能を体験しました。風邪薬の葛根湯に含まれる生薬、芍薬（シャクヤク）と甘草（カンゾウ）で「こむら返り」に効果のある芍薬甘草湯のつくり方、服用について試飲しながら教えていただきました。

芍薬甘草湯の試飲

研究中の山椒の可能性に触れました

講座の様子

さらに、SDGs17の指標の内3つのゴール（3：すべての人に健康と福祉を 4：質の高い教育をみんなに　5：ジェンダー平等を実現しよう）から、日本初の帝国大学女子大生となった黒田チカ博士の東京化学会で女性初の研究発表である「紫根の色素について」お話いただきました。紫根の歴史は古く、近年、医学的にも有効性について注目されています。

講座資料

生薬の色、質感、香り、食感を感じるひと時

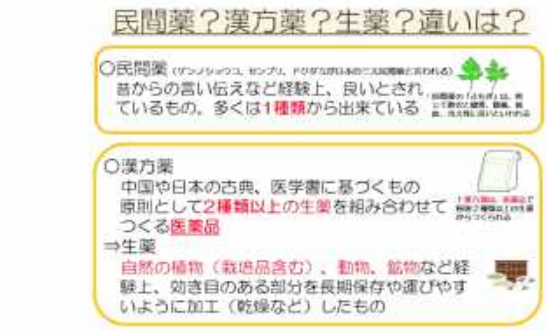
興味津津の受講生の皆さん

実際に薬研（やげん）で生薬を砕く

講座の4日後10月16日、ノーベル化学賞を受賞された吉野彰さんが、賞金の一部を地球環境問題の解決に取り組む若い研究者［日本化学会等］への資金に充てる考えを発表しました。

私たちの先人は、これからの地球環境を意識した学問と植物の力の関係、SDGsの考え方を、青い森ととも(共・智・友)に暮らしのなかで活かし、当然のように意識していたのかもしれません。

講座1：青い森とともに(共・智・友)に活きる 講座資料 一部抜粋



カッコン(葛根)

科名：マメ科(Leguminosae)
学名：*Pueraria lobata*
和名：クズ
薬用部位：周皮を除いた根
薬効：解熱、鎮痙
処方：葛根湯

ケイヒ(桂皮)

科名：クスノキ科(Lauraceae)
学名：*Cinnamomum cassia*
和名：ニッケイ
薬用部位：樹皮
薬効：芳香性健胃
処方：安中散
葛根湯

シャクヤク(芍薬)

科名：ボタン科(Paeoniaceae)
学名：*Paeonia lactiflora*
和名：シャクヤク
薬用部位：根
薬効：収斂・鎮痙、婦人科疾患
処方：芍薬甘草湯
当帰芍薬散

カンゾウ(甘草)

科名：マメ科(Leguminosae)
学名：*Glycyrrhiza glabra, Glycyrrhiza uralensis*
和名：ウラルカンゾウ
薬用部位：根及びストロン
薬効：矯味、消炎、鎮痛
処方：大黄甘草湯、芍薬甘草湯

|芍薬甘草湯の作り方|

|芍薬甘草湯の効能| こむら返り(筋肉のけいれん)
成人では1日7.5gを2～3回に分けて、食前または食間に経口投与する。

リンゴから糖尿病治療薬へ

講座1：青い森ととも(共・智・友)に活きる 講座資料 一部抜粋

講座２：楽しく学ぶ縄文時代の食生活

講師
児玉 大成 氏　Daisei Kodama

青森市教育委員会事務局文化財課 文化財保護チームリーダー

専門は考古学。縄文時代の環状列石の研究をはじめ、縄文時代における赤い顔料（ベンガラ）の製造方法も解明。
現在は、青森市教育委員会事務局文化財課に所属し、文化財保護チームリーダーとして、縄文遺跡の世界遺産登録業務のほか、文化財を活用したイベント運営等を行っている。

続いて講座２では、青森市教育委員会事務局文化財課　文化財保護チームリーダー　児玉氏に登壇いただき、北東北を中心とした縄文時代の環境や青森の立地条件を踏まえ、「食」を　テーマにお話いただきました。

特に小牧野遺跡や青森県の立地条件を踏まえ、ブナ・コナラ・クリ・クルミから、ドングリ・トチへと推移した経緯や、土器や道具の発明や燻製の製造などについてクイズ形式で楽しく分かりやすく伝えていただきました。

また、塩のつくり方や海藻や貝類、動物食についてもお話いただき、実際に黒曜石を使って、鹿のモモ肉を切る体験後、藻塩のみで実食しました。

参加された方からは、「我が家の包丁よりもよく切れる」「思ったよりも堅くない食感」等、様々なコメントがあり、縄文の食文化の一端を体験しました。

講座の様子

縄文人の調味料であったであろう藻塩

黒曜石で鹿肉を切る体験

黒曜石、鹿肉、藻塩を感じるひと時

切った鹿肉を焼いて藻塩のみで実食！

講座2：楽しく学ぶ縄文時代の食生活 講座資料 一部抜粋

クイズ①
この図は、何だと思いますか？

寒かった旧石器時代（氷河期）

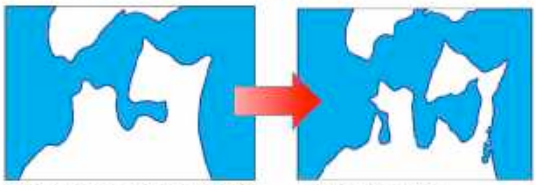
- 縄文時代が始まる前の、「旧石器時代」は、とても寒い気候でした。
- 「氷河期」といって、いちばん寒いときは、年間の平均気温が今より7～8度も低かったとされています。
- 氷が地球をおおい、海面の高さは、最大で、今より100メートル近く下にありました。

温暖化が進んだ縄文時代の前半期

- 地球の気温がだんだん上がり始めたころ、縄文時代が始まりました。
- 特に、縄文時代早期の終わりから前期のはじめごろ(約9,000年前～約6,000年前)は、もっとも気温が高く、地球が温暖化していた時期でした。

キーワード
「縄文海進」

- このように、温暖化により海水面が上昇し、海が広くなることを「縄文海進」といいます。

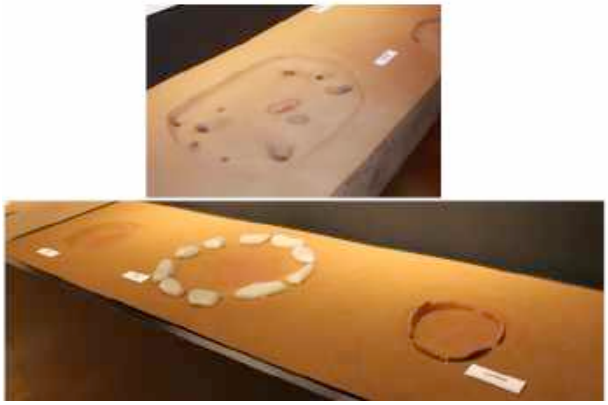


縄文時代の後半期は、寒冷化

- しかし、縄文時代後期(約4,000年前)になると、ふたたび寒くなり始めます。
- 寒冷化した日本列島では、海面が下がり、海が遠くなりました。
  ※現代の海岸線に近くなります。
- 森のようすも変わり、食べ物が少なくなり、大きなムラも減っていったと考えられています。

- 調理方法の変化「煮炊き」
- どんぐりなどの「アク抜き」も容易
- 調理時間の短縮
- 食糧の幅が拡がる
- 定住を可能とする

土器の発明によって、「炉」が作られるようになる。



講座2：楽しく学ぶ縄文時代の食生活 講座資料 一部抜粋

講座３：観光文化とSDGsについて

講師
佐々木 豊志 氏 Toyoshi Sasaki

青森大学総合経営学部教授
青森大学観光文化研究センター長

大学で野外教育・冒険教育を研究・実践をし、1996年私費を投じてくりこま高原自然学校を開校。数々の自然体験・冒険体験や暮らし体験を通じて青少年の自立や成長を支援してきた。
大学院では自然学校の社会的役割を研究し、自然学校を通じて多岐にわたるNPO・NGO活動に携わってきた。
2008年岩手宮城内陸地震で被災、2011年東日本大震災では災害支援活動に取り組み、自然体験が育む「生きる力」を実践している。2017年４月に青森大学に赴任し現在に至る。

１日目の最後の講座３では、青森大学観光文化研究センター佐々木センター長より、第２タームの企画主旨と、「観光文化」と「SDGs」の深い関わりについて解説しました。

まず、大越先生の講座１のおさらいとして、2030年に向けて世界が合意した「持続可能な開発目標」について改めて確認した上で、観光文化とSDGsが経済の動向と密接に関わること、さらに、私たちの先人である縄文人の営みに今後のヒントがあるのではないかという議論にまで発展しました。

SDGsの17の指標

講座資料：森と、暮らす

最終日の講座８でもご紹介しますが、「もり（木・水・土）」と命の関係について、北海道の徳村彰さんと杜紀子さんご夫婦の取り組みについて書かれた書籍『もり（木・水・土）はマンダラ』についてお伝えした後、児玉さんはじめとする講師の方々と参加された皆さんとの熱いディスカッションを展開しました。

参加者の皆さんからは、徳村さんの「もり（木・水・土）」の哲学についてさらに深く知りたいとの声もあり、身近な青い森の声に耳を傾け、持続可能な地球を次世代へ繋げるには今なにをすべきか具体的なアイディアなどを共有する場となりました。

『もり（木・水・土）はマンダラ』の著者 徳村彰さんの哲学について共有しました

講座3：観光文化とSDGsについて 講座資料 一部抜粋

そもそもの「経済」の原点は

【経済】
▶明治以降中国語から
経・・・治める
世・・・世の中
済・・・救う
民・・・国民・人民

【エコノミー（economy）】
▶ギリシャ語から
eco ＋ nomy
オイコス＋ノミア
（家）（運営）

経済はもともとは、家や地域の小さい単位。
お互いに助けあう、共生することを指す。
近代のグローバル経済が、本来の意味からずれ始めている。

道具とは？ 目的は？ 役割は？

違う道具
目的・役割・使い方が違う

y=a x の佐々木豊志的解釈

y=自分の生き方・知恵がある行動
反応・アウトプットの仕方・具体的な行動・言動・生き方・技能

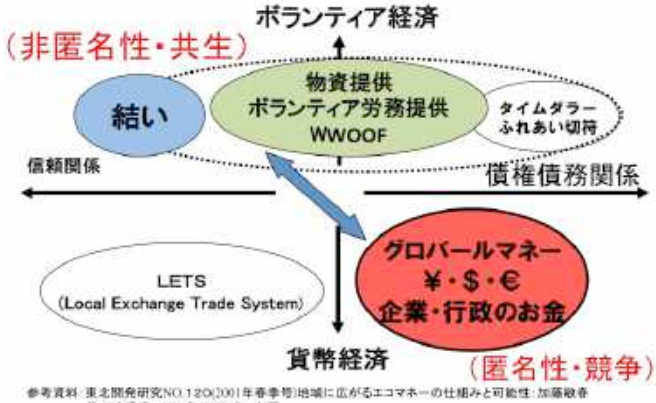
x=概念学習で得られる。知識
インプットされる材料。知識・情報・データなど。
日本では、たくさん知識を得た人が評価される。

a= 感情、心の係数・感じる心と力＝感性
知識を知恵に変える力
好奇心・畏敬・関心の源・行動の欲求の源・心の有様
ひとり一人違う取り組むときのエネルギーの源
体験活動・体験学習で育むもの・・・・

持続可能な社会のあり方

社会の3層構造 @シュタイナー	フランス革命 スローガン
①法・政治	①自由
②経済	②平等
③文化	③友愛（社会関係資本）

地域をつくるお金という道具の位置づけ



参考資料：東北開発研究NO.120(2001年春季号)地域に広がるエコマネーの仕組みと可能性：加藤敏春
佐々木豊志 2006年、2008年 加筆

地域をつくるお金という道具の位置づけ

参考資料：東北開発研究NO.120(2001年春季号)地域に広がるエコマネーの仕組みと可能性：加藤敏春
佐々木豊志 2006年、2008年 加筆

観光文化とSDGsの関わりについて熱い議論を展開している講座の様子

講師の方々と受講された皆さんとの集合写真

～講座を支えていただいた青い森の力１～

雲谷ヒルズ青森大学ヒュッテの近くのログハウス「こすもす」さんにて、紫黒米と青森の旬野菜のおかず御膳の夕食をいただきました。

曲げわっぱの器へ美しい盛付け。
五臓六腑に染み渡るおもてなしを味わいました。

青い森の力たち

雲谷温泉の近くに土がとても柔らく完全無農薬の桜田農園さんの畑があり、朝採りの新鮮な野菜と果実たちを提供いただき爽やかな薫りに包まれました。

酸ヶ湯温泉、名久井岳、栗駒山から湧き水が届き、夕食後も熱い会話が展開しました。

２日目は、台風19号の影響を心配しましたが、予想が外れ朝から青空が広がり、予定通り次の３つの講座を実施することができました。

講座4：青い森の植物観察・採取

講師
玉熊 恭子 氏　Kyoko Tamakuma

チキサニの森
NPO法人青森県樹木医会

東京農業大学地域環境科学部森林総合科学科卒業。
林業行政職員、ガーデナー、造園会社勤務を経て、現在はNPO法人青森県樹木医会の運営に携わっている。
また、チキサニの森を主宰し、森案内や観察会を企画開催している。
森で過ごす時間を楽しみながら、人間と植物との関わりを体感できるような案内を目指している。
2018年～青森市森林博物館樹木観察会講師
2019年～青森県立自然ふれあいセンター日曜観察会講師

午前中は青森山田学園が所有する山林（青森市内沢山）へ移動して、沢山（さわやま）集落の奥、バリカン山や楢木森山へ至る道の途中にある森を、チキサニの森・NPO法人青森県樹木医会の玉熊氏に案内いただきました。

森の入口には、集落の方々が「くすし様」と呼んで大切にしてきた久須志神社があります。境内には、大きな杉並木が続く参道や青森を代表する里山の自然が広がっています。ミズナラ、クリ、ホオノキ、シナノキ、サンショウ、青森ヒバ・・・

今回の講座では、この神社を観察ルートに加え、古来より私たちの生活を支えてきた植物の自然の姿を観察しながら、旬の実りを採取して、暮らしへ活かすヒントを紹介しました。

青森大学の森へ入る前に久須志神社へ参拝

また、遺跡がみつかっている沢山地区ならではの、興味深いものもあり、参加された皆さんと葉が少し色づいた青い森をあじわいました。

玉熊さんから、「室内で伝えることは難しい。森に入ると森から力をもらい、樹木や植物からのメッセージを伝えることができる」と伺いました。
3日目の講座でもご紹介する、徳村彰さん・徳村杜紀子さんご夫婦の発信されている、【もり（木・水・土）】の哲学の感覚に近いものを感じました。

森の観察を続けることで、新しい発見があるです。森から学ぶこと、私たち一人一人が森の一部であること、森が教えて（気づかせて）くれることが無限にあるのだと思います。

縄文時代、森と人との関係がとても深かったので、一万年以上、豊かな暮らしが続いたヒントが森にはあるようです。

自然豊かな沢山の森

講座4：青い森の植物観察・採取

天道様へ感謝を込め森へ入る前に皆で久須志神社を参拝しました

青い森との対峙　　目と関係の深い不思議な石

講座4：青い森の植物観察・採取 資料 一部抜粋

オニグルミ（Juglans mandshurica var. sachalinensis）
クルミ科クルミ属

◎名前の由来
ごつごつの実なので「鬼」。中国か高句麗から渡来した実と混同して「クレの実」か「クリの実」が転化。
◎人との関わり
縄文時代から重要な食料源として利用。
良質な油が採れることからクルミ油としても。
木材としては銃床として利用されてきた。近年は殻がスタッドレスタイヤのすべり止めに。

サンショウ（Zanthoxylum piperitum）
ミカン科サンショウ属

◎名前の由来
古名ははじかみ。はぜるカミラ（ニラ）の意味。
山に生える椒（はじかみ）として山椒と名付けられた。
◎人との関わり
若葉は「木の芽」、花は花山椒、果実は青山椒として食材に。果皮は香辛料や薬用に。木材はすりこぎに使われる。縄文時代の遺跡の土器から果実が出土されている。

キブシ（Stachyurus praecox）
キブシ科キブシ属

◎名前の由来
ヌルデの虫こぶである五倍子（ふし）の代用品として使われたことから。

◎人との関わり
タンニン成分が豊富なため、主に染料として利用。高級品とされたヌルデの代用として庶民のお歯黒の材料に使われてきた。

クロモジ（Lindera umbellata）
クスノキ科クロモジ属

◎名前の由来
樹皮の黒い文様を文字に見立てたことから。
◎人との関わり。
茶菓子の楊枝や生薬「烏樟」「釣樟」として胃腸薬に使用される。香料として化粧品や石鹸にも。
東北や北越では鳥木と呼ばれ、狩りの獲物をクロモジの木の枝に刺し、神への供物とする風習がある。鷹狩で取った獲物を贈る際にクロモジの枝で結ぶことが多く、鳥柴とも呼ばれる。

ミズナラ（Quercus crispula Blume）
ブナ科コナラ属

◎名前の由来
ナラと称されるコナラ属の落葉樹で、樹液が多く、伐採時に樹液がしたたり落ちるため。
◎人との関わり
日本では薪炭材として利用されてきたが、「ジャパニーズオーク」高級家具材の一面も持つ。
縄文時代から冬の保存食として使用されてきた。

トチノキ（Aesculus turbinata）
ムクロジ科トチノキ属

◎名前の由来
実が多くなるので「十（ト）」と「千（チ）」から。蜜蜂がトチの花を好んだことから「ミツバチノキ」が転じてなど諸説。

◎人との関わり
種子はデンプンやタンパク質を多く含み食用。
縄文時代の遺跡からも出土している。

ヤマグワ（Morus australis）
クワ科クワ属

◎名前の由来
「食葉（くは）」「蚕葉（こは）」から転じて、山に自生することから。

◎人との関わり
蚕の食餌として古来から重要な植物。
葉は「桑茶」として緑茶の代用に、果実はポリフェノール成分豊富な食材に、木材は弦楽器の材料、樹皮は和紙の材料として使用されてきた。

ツノハシバミ（Corylus sieboldiana）
カバノキ科ハシバミ属

◎名前の由来
ハシバミは、葉に皺がある実から「ハシワミ」。鳥が実を嘴（はし）で食む（はしではむ）ことを意味するなど諸説。

◎人との関わり
古来はハシバミの実から採取した油を灯明に用いた。和のヘーゼルナッツとして食用に。

オクトリカブト（Aconitum japonicum ssp. subcuneatum）
キンポウゲ科トリカブト属

◎名前の由来
花が古来の衣装である鳥兜・烏帽子に、鶏の鶏冠（とさか）に似ていることによる。
オクトリカブトは北日本に分布。

◎人との関わり
古来から毒矢に塗布し狩猟や軍事用に使用。生薬「附子（ぶし）」として強心・鎮痛に（毒性が強いため弱毒処理が必要）
日本三大有毒植物のひとつ。

クリ（Castanea crenata）
ブナ科クリ属

◎名前の由来
実の形が「石（くり）」に似ている。実の色が黒っぽいので黒色の古語「くり」からなど諸説。
◎人との関わり
縄文時代から食用として栽培。堅くて腐りにくいため、建物の柱や土台、鉄道枕木や家具の指物などに使用されてきた。

クズ（Pueraria lobata）
マメ科クズ属

◎名前の由来
かつて奈良県の吉野川（紀の川）上流に国栖（くず）が葛粉の産地であったことに由来。

◎人との関わり
葛粉として食用に、生薬「葛根」として発汗・鎮痛作用に用いられてきた。
またつるの繊維で作った「葛布」は平安時代より。
秋の七草のひとつ。

ホオノキ（Magnolia obovata）
モクレン科モクレン属

◎名前の由来
ほおは葉が大きいことから大葉に由来する。または包（ほお）に由来。
◎人との関わり
殺菌効果から食べ物を包む葉として使用。下駄の歯（朴歯下駄）などの細工物や、日本刀の鞘などにも。樹皮は、生薬名「厚朴」「和厚朴」。
アイヌ民族はホオノキの種子の煎じ汁をお茶に。

講座5：青い森の力いただきます-WS1-

青い森には、オオウバユリ、ツノハシバミ、ニガキ、オニグルミ、キブシ、クリ、ヤマハンノキ、アカマツ、ノリウツギ、クズ、カラハナソウ、ナギナタコウジュ、ヌルデ、サンショウ…など多くの植物が共生していました。

玉熊さんと、森からのお裾分けで採取した植物のなかでクリのイガを選びました。森でお弁当をいただいた後、青森大学ヒュッテにもどり、木綿のハンカチや手拭いの生地を結わいて、染め、クリのイガの色の力を楽しみました。

青い森のパワーランチは、おからこんにゃくのヘルシーな「ちゃまま」さんのお弁当を皆でいただきました

森で採取した植物から選びます

クリのイガ染めに決定

講座の様子

表情豊かなクリのイガ染め完成！

講座6：青い森の力いただきます-WS2-

講師
楠本 ゆり 氏　Yuri Kusumoto

NPO法人くりこま高原・地球の暮らしと自然教育研究所

環境芸術・空間演出系企画会社の企画開発部と人事部の兼任を経て、現在はNPO法人くりこま高原・地球の暮らしと自然教育研究所にて、東北の先人の知恵（衣食住医哲）を今の暮らしに活かす提案・実践の日々を重ねている。縄文時代の貴重な繊維苧麻（カラムシ）の栽培、糸績み技術の研究をしている。

2日目の最後の講座は、くりこま高原・地球の暮らしと自然教育研究所の楠本氏を講師に、繊維について。青い森から採取してきた植物のなかには、靭皮繊維として活用できるものが多くあります。

今回は、身近にある植物の茎が繊維として、糸になり布になり、紙の繊維等になることを改めて確認した後、「縄文」という名の由来である、縄の文様を土器へどのように付けたのか、その繊維は何であったかについて触れました。植物の繊維を撚った縄、右方向と左方向に撚った縄の文様があり、縄文の時代から、儀式に使われる縄文と暮らしに使われる縄文とでは棲み分けられていたのかもしれません。さらに、地域によって土器に施されている文様が異なり、流行などから地域性が垣間見えます。

岩手県の衣川と千厩から根分けいただいた苧（カラムシ）の栽培を栗駒で実践している一端をお伝えし、麻の種類と特徴、大麻（タイマ）については、戦後の栽培規制の動きについてもお伝えしました。国産大麻の栽培を復活させる動きが高まっていることや、糸を績（う）む技術を継承している団体、“岩手やまんばプロジェクト”「麻い・ろ・は塾」の活動を紹介しながら、大麻、苧麻、亜麻の織物に実際触れ感触の違いを確認しました。

神社へ奉納される栃木県産の高い技術が必要な職人さんの手わざによる精麻（せいま）にも触れていただきました。

青い森の「浅虫温泉」の名の由来は「麻蒸温泉」だったこと、縄文時代から麻の繊維を蒸していたこと、麻の葉模様についても共有しました。

技術の継承については、縄文人がどのように次世代へ技術を伝えていたのかを想像しながら、五感に意識を集中する実験的な講座となりました。

青い森の靭皮繊維

栃木県産の精麻

講座の様子

講座6：青い森の力いただきます-WS2- 資料 一部抜粋

～講座を支えていただいた青い森の力２～

最終日の3日目も晴天に恵まれました。

朝食前に、雲谷地区にで完全無農薬の「桜田農園」さんへお邪魔して、アーシングさせていただきながら、たわわに実る彩りあざやかな旬野菜、サルナシの実や黒胡麻の栽培など数々の実践を紹介いただきました。
また、美しいお花や果物たちをたくさん提供いただき、3日間の講座全体を華やかに彩っていただきました。

アーシングは、素肌で地球（大地、植物、水…）に触れ、体内に滞留した電極のバランスを整えてくれます。さらに、深く青い森の大気をたっぷり吸い込んで、ゆっくり呼吸を整えました。

気づき多きアーシング

美しいとまと

たわわなサルナシの実

ごぼうの花

見事なズッキーニ

紫式部と白式部と鮮やかな薔薇

黒胡麻の栽培の実践

豊かな青い森の力をいただいた後、青森大学ヒュッテにもどり次の２つの講座で締めくくりました。

講座7：ふゆみずたんぼ玄米の発酵水づくり

縄文時代の調味料や保存の方法はとてもシンプルでした。
味つけは藻塩であったり、動物の骨や海草類の出汁、縄文土器で煮込む汁物の糖分は白樺の樹液だったのではないかともいわれています。

初日の児玉さんのお話にもありましたが、保存の方法も、鮭や肉を乾燥させたり、燻製にしたり、アクの強い木の実は、水でアクを抜き、乾燥させ長期間保存ができるよう地中に保管していたようです。
縄文人のシンプルな暮らしにヒントを得て、今回は無農薬の玄米と湧き水だけでつくる発酵水をつくりました。生菜食主義（ローフード）の提唱者でもある、リトアニア出身の自然療法士アン・ウィグモア博士のレシピを参考にしたのは、アン博士自身が患った大腸癌をこの発酵水で治したこと、また腸と肌の関係は深く、酵素と乳酸菌の摂取により、腸内環境と自然治癒力が復活するという考えがあったからです。

今回は、ラムサール条約に指定されている宮城県蕪栗沼湿地帯で生きものと共生する農法「ふゆみずたんぼ」で育った齋藤肇さんの渾身の作であるササニシキの新米です。「ふゆみずたんぼ」は、冬にも田んぼに水をはり、微生物が土を豊かにし、渡り鳥が飛来し溢れたお米を食べ、無農薬なので良質な糞をして、土を踏みしめ土壌が呼吸するように、次の春を待ちます。

この蕪栗沼周辺の田尻地域は、全国でも珍しい市民参加型で、生き物と人の暮らしの共生に関する調査・研究に取組んでいます。国、都道府県、自治体、地域全体の環境意識が高まることを願います。
この講座では、3日間の集大成ということで、目安となるレシピのみお伝えし、参加された皆さんの重さに対する感覚に注力しつつ計量いただきました。仕上げた発酵水はお土産に、各ご家庭で育てていただき、まずは腸内の美しいご家族が増えますように。

講座の様子

ふゆみずたんぼ玄米
古代米と米粉

お土産の
ふゆみずたんぼ
玄米発酵水

講座8：青い森、森（木・水・土）の哲学、森の時代

最後の講座は、佐々木センター長より、講座３のテーマ「観光」と「SDGs」の関わりを軸に第2タームの講座のまとめと今後の課題を討議しました。

北海道の滝上で「もり（木・水・土）の子どもの村」を展開されている徳村彰さん（通称：おじじ）と徳村杜紀子さん（通称：おばば）が取り組まれている「もり（木・水・土）」と人との深い関わりについて一部をご紹介しました。縄文の営みも、おじじとおばばの営みも人が中心ではないという考えが共通しているように思います。

アーシングについて少し触れましたが、素足・素手で地球を感じるという営みのベースには、人も地球の一部であるということ、素足・素手で地球に触れる機会が減ってしまったために、地球の異変に気がつけなくなっているのかもしれません。

「毎日、もり（木・水・土）が新しい氣づきを与えてくれる」という、おじじの言葉が印象的です。講師の皆さんと参加された皆さんとで、これからの「観光」のあり方について、企画のアイディアフラッシュを経て、個別に発表いただき共有しました。

今後、体験型観光商品を通じて青森の自然資源から生まれる縄文スピリットが響くような企画に発展させる課題を持って終了いたしました。

講座の様子

～青森の自然体験型観光における現状の課題と今後の展望１～

●**大越 絵実加 氏** 青森大学薬学部准教授・SDGs研究センター

青森は、世界遺産白神山地に代表される豊富かつ多様な自然資源を有しており、さらに、歴史的価値の高い三内丸山遺跡など他の地域にはない特徴をもつ。また、伝統的なねぶた祭りや弘前城桜まつりは、国内外ともに観光資源として価値を認められている背景がある。

そのため、自然資源と文化、伝統、歴史等を掛け合わせることで新たな体験価値が生まれ、観光振興による交流人口の拡大と地域経済の循環につながることが期待される。

春～夏は、桜祭りやねぶた祭りなどが観光産業として確立されている。今回の自然体験型観光事業の企画として、初秋～冬シーズン向けのスポーツ系と、知識型の自然体験コンテンツの企画となっていた。

連休の旅行客をターゲットにした二泊三日くらいの自然体験について企画開発する事業者もしくは、ガイド人材の強化を図った。

今回体験したなかで、黒曜石を使った縄文型鹿肉焼肉体験は、黒曜石の切れ味をはじめて知ったので興味深かった。

「課題として」

① 国内外の旅行者のニーズがどこにあるのか。どんな時期で、どう反映させるのか。旅行者のニーズを聞けるガイド人材、事業企画者、とさらに企画提案する有識者が今回初めて交流した。青森が提供できる自然コンテンツを季節ごと（季節を問わずのモノ）抽出する必要がある。また、地元高校などと組んで、若者人材の参画を促し、地元定着を図る、など将来的な観光**人材の確保**が課題である。

② 自然資源と文化、伝統、歴史等を、どう掛け合わせるか。時期・景観・カラムシ和紙作り（草刈兼ねる）ねぶた和紙など、外国人旅行者向けの家族写真立て作成など思い出を残して**青森県を意識づける。**

③ 季節もの企画の場合のトラブルシューティング。紅葉がずれた、雪がないなどの場合、季節を問わずのモノとの掛けあわせ、など。

④ 自然環境の保全、維持。夏場の草刈り、安全確保などの、インフラ整備の人材・資金不足

⑤ 周知・情報発信。まだ、企画を打ち出している段階の上で、資金面で無理のない産業成長を計れるような情報発信。

「今後の展望として」

企画次第で、大きな産業に発展する可能性が青森にはある。

① 遊んでいるようで、楽しめて、知識が得られるような自然体験型観光企画などが青森では実現可能。
遺跡、山地、海、季節（雪）、味覚、人（方言が魅力の企画）、和紙、植物（栗イガ）草木染

② スポーツ人口をターゲットとした企画（冬）が実現可能。
北海道ニセコスキー場のような誘致の際に、ホテルなどの大掛かりな宿泊施設ではない地元ならではの、こじんまりとした古民家を使った宿泊。

③ 五感（視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚）体験企画が実現可能。
ハーブ乾燥葉りんご剪定枝チップ燻製体験、漢方薬実演（治療目的ではない）、
月明り体験、夏の熱中症対策（気温が低いので）快眠企画

安全性確保など精通したガイドを伴うツアーが必要なため、それぞれ企画のガイド人材育成や、環境を整備できる実施事業者の確保が大切なカギを握る。

1）人的・資金的な無理をしない。
2）最初は、持続可能な範囲にとどめる。
3）課題は着手できるものから順にクリアしていくことを目指す。

～青森の自然体験型観光における現状の課題と今後の展望２～

●児玉 大成 氏　青森市教育委員会事務局文化財課 文化財保護チームリーダー

2020年1月16日に世界遺産登録を目指す『北海道・北東北の縄文遺跡群』の「推薦書」が外務省からパリのユネスコ世界遺産センターに提出されました。今後は、ユネスコの諮問機関による現地調査（2020年8～9月頃予定）を経て、世界遺産委員会で世界遺産の登録審査・決定（2021年6～7月頃予定）を目指すことになります。

このような状況を踏まえ、縄文遺跡群の構成資産を所管する各自治体を中心に、2021年の世界遺産登録後における観光面での経済波及効果観光面での経済波及効果などを見据えた、縄文遺跡の保存活用に係る各種取組が検討・実施されています。

一部の大学では、縄文遺跡の世界遺産登録の機運醸成を目的としたイベントが実施されていますが、観光をテーマとした実例は寡聞にして知りません。

青森大学観光文化研究センターには、今回の「産学連携による観光産業の中核人材育成・強化事業」の成果・実績がありますので、それを発展した形で縄文遺跡を活用した観光商品の企画や人材育成等への取組みに期待したいと思います。

●玉熊 恭子 氏　チキサニの森・NPO法人青森県樹木医会

「課題として」

2日目の講師としてプログラムの構成から関わらせていただきました。初めての開催ということもあってセミナーで取り上げたい内容が多く、絞るまでに時間がかかりましたが、それでも盛り沢山の内容になってしまったように思います。

青森（東北）には数多くの「縄文」・「植物文化」の素材があるだけに、素材や目的をあえて絞る必要もあることやプログラム構成に工夫が必要なことを今回理解することができました。

また、第1タームと同様、関心の高いテーマではありましたが、土地柄か、「人材育成」という言葉に躊躇する人が比較的多い傾向にあるため、気軽に参加してもらうための工夫も課題だと思いました。

「今後の展望として」

個人的には地元文化に精通している方や、研究者と交流を深めながら、学んでいくセミナーに関心があります。また、縄文人の暮らしを理解することで自然との共存について考えることができるような体験型のセミナーも広い層に関心をもってもらえるのではないかと思いました。

集客に関しては、地元の植物文化に関係する団体に周知し、協力を要請することでさらなる交流が生まれる相乗効果に繋がるのではないかと期待しています。

全体的には、今後、首都圏在住者向けに集客することもできるのではないかと考えます。首都圏に住む方々は自然豊かな土地への憧れが強く、地方文化にも関心が高い傾向にあると思います。よって、このような自然体験型観光をツアーにして、よりディーブな体験型観光として提案していくことも充分可能だと考えます。

●楠本 ゆり 氏　NPO法人くりこま高原 地球の暮らしと自然教育研究所

「現状の課題」

先人の智慧から学び、今の暮らしで実践できるヒントを得られるような講座を目指しましたが、アイディアが多く、的を絞るのに苦労しました。人材を育成する視点においては、シリーズ化を視野に入れ、誰もが短期間で企画し運営できる内容ではないことも分かってきました。実践を積み重ねる過程にこそ発見があるコンテンツだと思います。

「今後の展望」

企画段階から、SDGsと東北の自然の力を感じられる企画コンテンツを佐々木センター長と玉熊さんとの打合せを重ね「縄文人」の営みに多くのヒントが詰まっていることに気づきました。また、大越さんと児玉さんの魅力的な取り組みに刺激をいただきました。

個人的には、縄文文化をさらに掘り下げ今の暮らしに活かす実践を重ねつつ、ヒポクラテスやアーユルベーダの哲学、中国の陰陽五行説からのエッセンスも取り入れた企画に発展させたいと考えています。

全体的には、主体性が伴えば解決できない課題はないと考えています。

【受講者アンケートまとめ1】

講座で最も印象に残ったことはどのような話ですか？

- 実践家の専門性がすばらしかった！
- 参加者も同じ方向性の方々ばかりなので、充実！！
- 学んだことはくり返さないと「忘れる」ので、日常生活の中で深めたい！
- 発酵水の作り方
- 青森に関連づけた生薬の話
- １００年前の黒田チカ博士の貫いた生き方がとても刺激となりました
- SDGsに関連させた漢方のお話に感動です 縄文時代についてより充実した話しがきけた
- 漢方の細かな成分等、自分で作って飲める！
- 黒曜石の話
- 現在にも受け継がれている文化、技術を食・薬を通じて勉強し、青森の持つ土地の魅力と結びつけ、地域の発展や商品開発に結びつけるヒントを得ることができました
- 生薬を利用する上での個人差、副作用等 注意を踏まえた利用の方法など
- 身近なフィールドの樹木、植物プラス文化についても、しっかりと下調べの上、楽しく説明してくださり、自然を身近に感じ豊かな時間を過ごすことができました
- 樹木の種類、用途、などの説明
- 興味はあっても　なかなか木の見分け方、どのように人々に使われてきたか等自分ではわからない事を教えていただき、ますます樹木を身近に感じられた
- 近くの森で活動する学生さん達を初めて知りました
- 間伐、野菜作りなど挑戦している若者達に希望を感じました
- 開発ではない、自然の有効利用を大学が率先してやっていただけるのは素晴らしい事だと感心しました
- 自然を大切にする生活
- 麻の糸のうみ方
- 普段生薬に関心があったので、具体的な効能をひとつひとつきけたことがよかったです
- 生姜と乾姜の話
- 沢山では、普段目にしている山野草の大切さなどを詳しく知ることができ、自分のガイディングにも生かせそうな知識がたくさんあった
- 縄文人は分け合い協力し合いながら生活していたこと 現代人に欠けていると思った
- 森を歩いて多くの木や草花の名前や由来、生活の工夫など初めて聞き勉強になりました
- とても満足できる講座でした
- 印象的な事は、神社で石に穴が空いている所に髪を通すと目が良くなる話です何故、石に穴が開いたのか？とても興味深かったです
- 栗のイガで絞り染めは楽しかった
  今度は色々な草花で糸などを使って本格的に作ってみたいです
- 薬草などの基礎知識が自分にあればもっと楽しめたと思います
- 鹿肉を黒曜石で切る→縄文人と同じ事をしていい体験になった
- 麻で糸うみ→麻の力強さを感じた
- 沢山探索
  →沢山を今まで何気なく見ていましたが、文化など色々知っていくと愛着が湧いてくる
- 体験型学習を体験出来たこと
- 多様な職種の方々と同じ場で話す事ができてとても良い経験になりました！
- すべての講座に参加できませんでしたが、2日目の玉熊さんの森を散策する体験がとても面白く印象に残りました
- 山の自然に触れていなかったことから見るもの多くが目新しく、教えてもらう知識はすべて楽しく感じました
  将来誰かと森に入る時には自分がそちら側になりたいと思っています
- 生薬に少し手を加えることで生まれる成分の話がとても興味深かったです

【受講者アンケートまとめ２】

どうして印象に残りましたか？

- 多ければ良い！というものではなく、バランス！
- 実例をあげて説明されたから
- 健康に良いと思われたので
- 生薬に興味があったので
- 意外なことを知り勉強になりました
- 青森の寒い雪の多いというものをメリットとして、産地となる可能性を感じたため
- 日常で使用している芍薬、甘草湯がネットで買えて、自分で煮出して飲めるから！
- 実際に黒曜石の切れ味を確認できたので
- 麻に触れることができて楽しく、大事な麻を頂けて有り難いです

これからの講座で扱ってほしいテーマ、あるいは期待することはありますか？

- 「SDGsを自分ごとに」→「地域ごとに」
- 森での自然食 SDGs がもっと啓蒙されること
- 徳村彰さんの「もり」はマンダラを教えていただき感謝です
- たて穴式住居でねむってみたいです
- 山歩き　地域の巨樹、古木
- 宣伝広報において内容が分かりづらく残念でした。内容はとても充実していたのに、もっと人が集まると思います！
- ワークショップ、体験型の講座を期待します
- 青森の歴史　特にアイヌ～蝦夷について
- SDGsにつながることなら何でも
- 教育、持続経済
- 昔ながらの遊びもいいかも…体験コーナー楽しみにしています！
- 今回は縄文文化もそうですが、津軽文化体験とか青森ならではの物をやってほしい
- 実際に現地に行って体験するのが1番だなあと思いました。沢山に行き見て触れて知識を得るなど大変勉強になりました
- 縄文文化も実際に現地に行ったり、縄文人がやっていた事を体験してみたりしてみたら良いと思います
- やはり体験型学習だと思います
- 自然があればどんな取り組みもSDGsに繋がる素晴らしいものばかりです個人的には畑を使った講座が一番楽しいかなと考えています
- 実家が農家でしたので桜田さんの畑でのアーシングは昔を思い出す感覚になりました

第3タームは、青森の冬の自然資源を素材に12月14日（土）15日（日）の1泊2日で酸ヶ湯温泉周辺にて実施。「青森の雪満喫プログラム！」と題し、世界屈指の豪雪地帯で冬山のアクティビティを体験し、その中に潜む危険性を学ぶ観光企画を試みました。

【1日目】バックカントリーツアー体験・セルフレスキュー体験

講師
其田 知志 氏　Satoshi Sonota

八甲田山酸ケ湯ツアーガイド

森県五所川原市金木町出身。
小さいころから自然の中で遊び育ち、地元の高校を卒業後東京へ就職するが、自然環境を求めて1年後すぐに帰青、父の影響で八甲田山のBCガイドを始める。
以降、八甲田山ガイド歴１９年。縁あって、故・三笠宮寛仁親王殿下のご意思による国内と国外のガイド同士の交流とスキルアップを目的としたヨーロッパ山岳スキーツアー研修合宿に参加し、オートルートやモンテローザなどヨーロッパアルプスを２０座ほど経験。自然環境での遊びや食も含めてとにかく青森が大好きで、青森から出たら生きていけない男。

・JMGA認定ガイド
・JAN雪崩業務従事者レベル１
・八甲田山ガイド協会 事務局長
・八甲田山ガイド連絡会 理事

八甲田山酸ヶ湯ツアーガイドの其田氏講師のもと、安全に楽しくツアーを行うためのガイドとして必要な地形の把握と、行動マネージメントについて実践しました。全体的なツアーの流れを参加者自ら体験し、雪崩地形や地形の罠を避けより安全な地形を繋ぎ移動するための知識や、滑走時の注意点を重点的に解説され実戦さながらの濃い内容となりました。

八甲田山でのバックカントリー体験

セルフレスキュー体験（ビーコンサーチ）

雪崩に遭遇した場合のレスキューの演習（ビーコンサーチ）も時間制限は１０分の設定で以下の要領で実施しました。

1. シグナルサーチ（40m間隔でビーコンの反応を探す）
2. コースサーチ（標的に近づいたら速度を落とし探す）
3. ファインサーチ（十字に動き一番近い所を探す）
4. プロービング（25cm感覚でスパイラルプロービング）
5. 掘り出し（深さと同等の下方から掘る）

終了後のミーティングで良かった点、悪かった点をふりかえり、ビーコンに表示される数字ばかり見るのではなく、埋没者の残留品などをヒントに目視で確認しながら捜索することの大切さを学ぶ良い機会となりました。

ビーコンを使い埋没者を捜索

【2日目】イグルーづくり実践演習・イグルーCAFE & BAR

講師
佐々木 豊志 氏　Toyoshi Sasaki

青森大学総合経営学部教授
青森大学観光文化研究センター長

大学で野外教育・冒険教育を研究・実践をし、1996年私費を投じてくりこま高原自然学校を開校。数々の自然体験・冒険体験や暮らし体験を通じて青少年の自立や成長を支援してきた。
大学院では自然学校の社会的役割を研究し、自然学校を通じて多岐にわたるNPO・NGO活動に携わってきた。
2008年岩手宮城内陸地震で被災、2011年東日本大震災では災害支援活動に取り組み、自然体験が育む「生きる力」を実践している。2017年４月に青森大学に赴任し現在に至る。

講師
喜來 大智 氏　Daichi Kirai

青森大学
自然サークルSDGs代表

青森生まれ青森育ちで自然が大好き。
自然体験活動を通じて地球規模の環境問題を考えるサークル「自然サークルSDGs」を立ち上げる。
2018年３月 朝日新聞社主催「大学SDGs ACTION AWARD!!」で下川町賞を受賞。昨シーズンから八甲田山のBCガイドでも活躍。冬の観光イベントでは各地でイグルー作りを行っている。

２日目は、積雪が多い青森の自然資源を活用するもう一つのプログラム「イグルーづくり」。佐々木センター長と喜來氏を講師に、イグルーづくりの座学後に実践しました。冬の資源「雪」を活用した観光商品として直径約2メートルのイグルーを製作しました。

イグルーは北極圏のイヌイットが狩りをする時に氷で作る仮の宿で、製作工程は以下のとおりです。

1. 雪を踏み固める
2. スノーソーで雪のブロックを切り出す
3. ブロックをらせん状に積み重ねる
4. 入口や内装を作る

「作り方がイグルーのユニークだ」「完成した時の達成感が印象的だった」また、「今回のセミナーで八甲田山の雪の持つポテンシャルの高さに驚かされました」などの受講生の感想がありました。

青森の雪満喫プログラム！

座学を経て実践へ

1: 雪を踏み固める

2: スノーソーで雪のブロックを切り出す

3: ブロックをらせん状に積み重ねる

4: 入口や内装を作って完成！

イグルーCAFE & BAR

イグルーの中は非日常の空間になり、旅行者にとって印象に残る演出が可能でもあります。イグルーづくりの前夜に、すでに完成させているイグルーに入って、翌日のイグルーづくりのイメージを膨らませます。

この異空間の中でホットワインなどを提供し、豪雪地帯ならではの冬の楽しみ方を体験しました。受講生から「インスタ映えする」「イグルーの中は意外と暖かい」等のコメントがありました。

スパイスたっぷりチャイ　ホットワイン、ドライフルーツ＆ナッツ

～青森の自然体験型観光における現状の課題と今後の展望～

●其田 知志 氏　八甲田山酸ヶ湯ツアーガイド

「課題」

現場を知る人材と紹介する人材の育成とそのための「環境」づくり。
現場を知る人材と紹介する人材との連携。
より優秀な人材を育てるとともに、
現在第一線で活動している人材と連携し良い関係性を築いていくことが重要。

「今後の展望」

個人的には当初の目的通り、青森に必要なのは現場をより熟知した観光案内「DMO」組織。そのためには課題にある業界を知るための環境づくりが欠かせないと思われる。

今後、青森大学が推進してゆく「自然体験特化型観光コース」はその環境づくりのための大きな役割を担うとともに、国内・国外ともに誘客・集客できるとても発展性・可能性のあるものになってゆくはず。

全体としても当初の展望通り、青森には四季を通して可能性しかない！
これほど自然体験・観光が手軽にでき、特化した場所は世界的に見てもとても貴重。
この強みを存分に活かし、青森で働き・定住し国内外からたくさんの人を呼び込める優秀な人材をたくさん産み出すことで、雇用も生まれるはず。青森から離れるしかなかった時代はもう終わりにし、青森へ集まる時代へと変えていきたい。
そのために自分にできる範囲で微力ながら少しでも力になって行きたい。

●喜來 大智 氏　青森大学 自然サークルSDGs代表

「課題」

若い人のウィンタースポーツ離れ。
今後ガイドがどのようになっていくのか先行きが不安。ウィンタースポーツ人口が減少していくと、業界全体としても成り立たなくなる可能性がある。

現状は、まだ勉強中ですので今後とも今のガイド活動やSDGsサークルの活動を通してこれからの自分の進む方向性について考えていきたいです。

「今後の展望」

ガイドをして2年目です。
この職業を通じて社会課題（SDGs）を解決したいと考えている。

ただお客さんを集めて体験をしてもらってお金をもらうというのではなく、ガイドという活動を通して社会課題を解決できるような仕事をしていきたい。

「おすすめルート・ポイント」
・樹氷を通るルート
・ホワイトアウト
・非日常体験ができる

【受講者アンケートまとめ1】

講座で最も印象に残ったことはどのような話ですか？

●単純なツアーではなくガイドの視点にたったリスクマネジメントを学ぶことができた
●ビーコン　→具体的な練習をすることができた
●常にリスク管理するということ
●自然と天気は常に変化する
●とても親切で詳しかった
●ビィンディングトラブルが起きリアル体験できた　→ぞっとした
●日頃のメンテの重要性に気づいた
●とても良い体験ができました
●どうすれば安全に楽しめるかが分かった
●山の危険、安全のこと
●初めて雪山に登って、すべてのことが初めての事だった
●色々な事に気をくばらないといけないと思った
●山を登るまではよかったけど、おりる時失敗した
●自分もせんぱいみたいにうまくなりたい
●セルフレスキュー　→三種の神器、人とかぶらない、なるべくすばやく、雪の中でのレスキューがかっこいいと感じたから楽しかった
●セルフレスキューの大切さを感じる事ができてよかったです
●BCツアーでは、トラブル、けがなどもあったので色々な体験できて全体的に楽しかった
●ツアーやレスキューなどは初めてだったので何をするのかやるまで不安でしたが、楽しくてしょうがなかったです
●初めてのことだらけのことを体験できた
→かかとがハズレる金具・雪山を登る・ビーコンでの捜索練習
●ビーコンを使ったの捜索練習　→ビーコンの特性を理解し、実際に捜してみる機会が初めてであり、これまでなかなかできなかった
●レンタルの板、エッジがないのかたれすぎているのかゲレンデで止まれなくて恐かった
→横滑りしやすいが止まれない
●　　一から作れたこと（下堀で作り始めるのは今回初めて）
→粉雪で固めるのが難しそうな雪でも作れることがわかった
●一連の講座は観光人材を発掘するきっかけになるため、次のステップについても話があればいいと思う　→例えばBCスキーガイドになるにはどうしたらいいか等
●またイグルーつくりたいので機会あれば連絡ください　→手伝いに伺います
●実地を通して、要点を理解できた
●青森の雪質　→青森の雪はイグルーづくりに適しているということ
●初めてのイグルー作りで雪の中での生活している方々の生活を少しでも体感できました
●イグルーがイヌイットの方々の家に使われている事　→環境に良い家なので
●初めての体験でしたが、本当に楽しい時間でした

【受講者アンケートまとめ1】

これからの講座で扱ってほしいテーマ、あるいは期待することはあります

●青森の冬ならではの新しいコンテンツづくり
●雪の積もった時期での実施だとよりよかったかもしれない
（12月は少雪の可能性があるため）→ガイドとして注意すべき事を学べると思うから
●春のツアースキー
●段階をつけてシーズン中に3回くらいやってほしい
●スキーやボードの実習
●雪山の危険性
●BCツアーを通して、登る事の楽しさ、リフトやゴンドラなどの乗り物がいかに楽か
→BCツアーがこれからもっと広まる事に期待です
●BCスキー、そのものを体験するのがあったらいいと思いました
●青森はイグルー王国になりうる自然環境をもっている
→地域おこしにイグルー王国！おもしろいテーマだと思う
●青森の雪を活かしたスキー以外のアクティビティ
●SDGs

第４タームは、インバウンド（外国人観光客）を想定した商品企画PRをテーマに行ないました。青森大学国際交流センターが共催となり、青森大学留学生（中国・韓国・台湾・ネパールからの留学生６名と日本学生３名）と講師が合同で、青森の観光インバウンド対応を意識し、留学生が自国へ青森の冬の体験型商品をプロモーションする企画会議と映像制作を実施しました。

青森の冬・雪という自然資源活用を検討するため、留学生に冬のアクティビティを実際に体験してもらい、自ら自国へ紹介する（各国の同世代とその親等家族層をターゲット）内容を考え討議しながら動画撮影の企画制作を実施しました。

日程と内容：
⑴11月18日（月）20:30-21:30　@青森大学・佐々木研究室
　スタッフ打合：目的とゴール設定、内容の検討、
　　役割と第４タームの流れの確認
⑵11月29日（金）16:00-18:30　@青森大学・総研会議室
　事前説明会：留学生顔合わせ、動画イメージ共有、意見交換、
　　体験したいアクティビティの選定
⑶12月21日（土）午後：オリエンテーション、動画制作企画
⑷12月22日（日）午前：スノーハイク、午後：動画企画会議 青森の伝統食
⑸12月23日（月）午前：イグルー作り、午後：動画編集作業、
　　夕方：イグルーにて交流会
⑹12月24日（火）午前：ファットバイク体験・雪板体験

事前説明会の様子

オリエンテーション

青森大学ヒュッテ前での撮影

講師
ミハイ・フロリン・アポスト・オータ 氏
Mihai-Florin Apostu-Oota

青森大学非常勤講師
フリーランス

ルーマニア出身。
21歳の時に留学生として青森に初来日。その際に青森の雪を見てここに住みたいと実感した。その後15年間、青森の自然を冒険しながら毎日楽しく過ごしている。普段は英語塾を経営していますが、休みの日には息子、家族や友人と一緒に青森の四季をエンジョイしている。

講師
後藤 欣司 氏　Kinji Goto

モディ株式会社

青森県南部町出身。
大学卒業後は東京で公務員をしていました。
東日本大震災後、東京からUターンして起業。名久井岳トレイルランニングやカラフルランなど地域資源を活用したイベントを企画運営。
現在は起業したマーケティング会社でCRM、CXMを活用したマーケティングコンサルを行っています。

【動画制作企画】

事前説明会から今回の企画の目的・ゴール等を確認し、講師のミハイ・アポスト氏、後藤欣司氏を中心に留学生が主体となって動画製作に取り組むために制作企画会議を重ねました。

青森の冬のコンテンツを紹介する動画制作の目的と対象を説明した上で、それぞれの体験が自国ではどのように評価されるか？をポイントに動画で必要な素材を撮り貯めました。

今回は学生が自分の大切な人へ紹介できるか？（ロコミやCXMの観点から）を重視することを確認して進めました。

学生たちが描いた雪絵をドローン撮影 ：ミハイ氏

【スノーハイク】

第４ターム２日目は、第３タームの講師でもある其田知志氏（八甲田山酸ヶ湯ツアーガイド）のガイドで、八甲田ロープウェイで山頂駅まで上がりスノーシューで樹氷原を散策し、雪原の傾斜でスノーフラッグを体験。スノーフラッグ体験の様子を写真撮影並びにドローン等を用いて動画撮影しました。

スノーハイク体験

スノーハイク後の集合写真

【イグルーづくり】

３日目は、酸ヶ湯温泉脇に直径3.3m、高さ3.5m程の本格的なイグルーを参加学生と共同制作した。学生からイグルーづくりをしたい理由が２つ挙げれました。

１つは「映える（インスタグラムで良く写る）」からやってみたい。参加学生の国の気候は様々ですが、「こんなに雪が降り、本格的なかまくらは他の場所でみたことがない。」「これを撮ってSNSに載せたら絶対みんなに羨ましがられる。」といった世相を反映する意見がありました。

２つ目の理由は、イグルーづくりという共同作業を通して講師、国籍の違う参加学生の垣根を超えて動画制作を行うチームづくりのため。それぞれの性格や特徴、得意なことや苦手なこと、想像力や協調性など様々なものがみて取れました。

イグルーづくりによって、学生同士でお互いを知ることができたと共に、動画制作をするに当たってのチームにおける自分の役割を自覚できる体験ができました。

イグルーづくりの様子

スノーアーティスト

イグルーづくりで育まれるチーム力

イグルーBAR 天井から撮影：後藤氏

【スノーバイク】

3日目は、第１タームの講師でもある花田カズオ氏（BBB AOMORI TOUR GUIDES）が弘前城を中心に展開しているスノーバイクを体験しました。
自転車が盛んである台湾の学生にとっては、雪の上を走るタイヤが太い自転車に非常に新規性があることがわかりました。

青森大学ヒュッテを中心にして、モヤヒルズの冬季利用していないキャンプ場で実施しました。今回は雪が少なく人が出入りしない場所で走行する上での問題は全くありませんでしたが、雪上なので圧雪されていないと走行ができなかったり、安全面の問題を確認する実施となりました。

新鮮な感覚と「雪の上で自転車？」という斬新さが「映える体験」だということで好印象なコメントがありました。

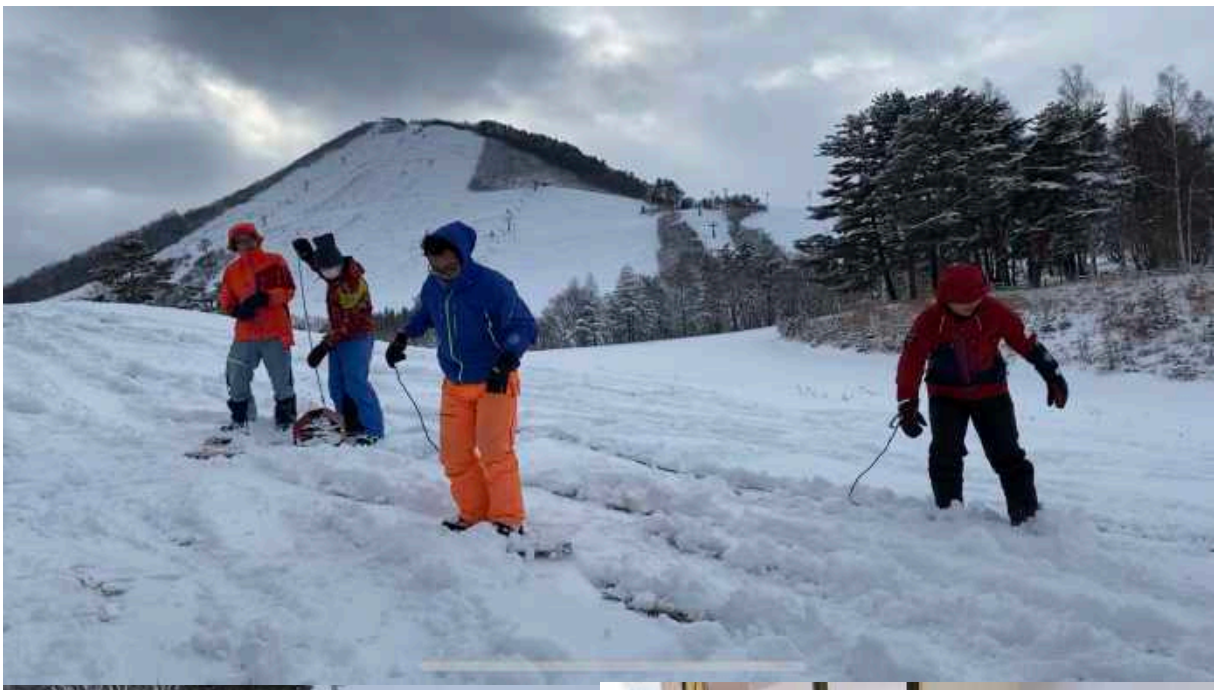
ファットバイクで雪上クルージング

【雪板体験】

青森大学ヒュッテ前のゲレンデでの雪板は、モヤヒルズのキラーコンテンツになり得るかもしれないと直感できるアクティビティとなりました。

モヤヒルズのフィールドは、八甲田山でバックカントリーをする前のレベルの練習や子どもの練習には最適であることを確認できました。今後の冬のインバウンド観光にも適応できるコンテンツになりうる。「一日中ずっと雪板をしていたい！」と目を輝かせる中国人学生の感想が非常に印象的でした。

ゼミの授業で雪板を作るところから体験させ、青森大学ヒュッテで自分のオリジナル雪板を作る体験とゲレンデ以外の場所を利用許可申請して雪板体験も有効な体験観光商品に成り得る可能性を感じる実施となりました。



手軽に遊べる冬の観光体験の新定番？

【津軽伝承料理】

２日目の夕食には、津軽地域の伝承料理を次の世代へ伝える活動に取り組まれている「津軽あかつきの会」の皆さんが学生たちの夕食時間から逆算して、ぜんまいやわらびの塩抜きをしてくださり、貴重な冬のお膳料理を提供していただいた。雪国ならでは発酵保存食や珍しい味覚「飯ずし」「さめなます」「イガメンチ」「千枚漬」等、留学生からは「経験したことのない味」との感想があり、青森に暮らしていてもなかなか食べる機会の少ない伝統食を体験しました。

盛付け体験

伝承料理について学ぶ

美しい彩りの冬のお膳

津軽あかつきの会 活動紹介

津軽地域の伝承料理を次の世代へ伝える活動に取り組む「津軽あかつきの会」は、青森県弘前市郊外の石川地区にて、予約制で津軽の伝承料理を提供しています。

約30名の会の皆さんは、春から秋の季節はその時々の旬の味覚のものを収穫し、雪のない春～秋の季節こそ、収穫された様々な野菜や山菜、魚等を乾燥や塩蔵、瓶詰、樽漬等、保存して、来る冬に備え、冬は保存食を水で戻したり、塩抜きをすることによって、おいしくいただけるお料理に活用しています。

かつて雪で遠くまで出かけることが難しかった季節に津軽地方の家庭で食されていたお料理は、そういった昔の人たちが雪で閉ざされた季節も元気に生き抜くために考えてきた知恵と知識が詰まっています。

昔は全ての食材は捨てるところなく、全て使う、または保存し、外での野良仕事でもお皿も貝殻を使う等、自然に還るもので生活が保たれ、ごみというごみが出ないために捨てる行為はないという循環型の生活が送られていました。

SDGsに繋がる津軽地域の暮らしに根ざした伝統文化を、食を通して発信し続けています。

【オリジナルハーブティづくり】

食後には、和ハーブ協会インストラクターの戸澤氏に青森産のハーブ等、植物の効能を教えていただきながら、オリジナルブレンドのハーブティづくりのワークショップを行いました。

白神産のクロモジや青森市産ナギナタコウジュ、ジャパニーズローズ・ハマナス等、多くのハーブをご用意いただき、香りを確認しながら、各自ブレンドを考えてハーブティを楽しみました。留学生のお気に入りはアマチャの甘みだったようですが、一日の摂取量は控えめにという貴重な説明もありました。

講師
戸澤 依香子 氏　Ikako Tozawa

「あおもり和ハーブの会」副代表
和ハーブ協会インストラクター

１５年にわたる東京での西洋ハーブや漢方を活用する生活ののち、地元青森県黒石市へ戻り、近郊で自生している山野草をはじめ、日本の植物が自身に合っていることを実感し、興味を持つ。その後現在にいたるまで、日本の植物の食料、香料、染料としての活用、及びアイヌ・マタギの生活を中心に趣味で勉強を続けており、これらの分野の講座やワークショップ等で講師及びコーディネーターを務める。

ブレンド用の青森県産等のハーブたち

ワークショップの様子

留学生がブレンドしたオリジナルハーブティ

【青森の伝統食】

ターム期間中の食事に「青森の食文化の魅力」を伝えることも試みました。また、SDGsの目標である**「12. つくる責任 つかう責任」**を意識し、できるだけ青森県産の海産物と無添加の食材を用いて、ゴミが少なくなるよう工夫しました。

今回は、五戸町で無農薬・化学肥料不使用のお米・野菜づくりに取り組む「おとみず」の佐藤さんに協力いただき、小豆や紫黒米と一緒に炊いたご飯をベースに、「けの汁」「せんべい汁」「じゃっぱ汁」「生姜味噌おでん」や林檎や果物・野菜等をスムージーでいただきました。

青森の伝統食に加えて、SDGsの指標を意識した若い農家さんの食材を用いて、青森ならではのSDGsオリジナルメニューへと展開しました。

青森産の力づよい食材

せんべい汁

朝食づくり

スムージー

【イグルーBARメニュー】

学生たちが作ったイグルーで、非日常の空間を白樺の枝のロウソクや土に還る素材等で演出し、青森県産ふじのドライりんごや紫芋のチップス、戸澤さんに提供いただいたアマチャを用いた砂糖不使用のチャイを皆でシェアしました。

イグルーの中は、非日常の異空間

【 PR 動画完成URL 】

参加学生から「今後もプロモーションに関わりたい」という申し出を受け、**「自国の大切な人へ紹介する自然体験PR動画」**は、学生主導で編集作業に取り組み、制作されました。

動画プロモーションという、国と国をつなぐ手段として、青森の小さな現場で国と国を跨いだプロジェクトとなり、完成した動画を以下のURLにて公開しています。

“Share Aomori” 青森の冬の魅力紹介します

完成動画（3分version）
https://youtu.be/2N5RAycFSnc

完成動画（1分version）
https://youtu.be/xJtlYOBCdnw

～青森の自然体験型観光における現状の課題と今後の展望１～

●ミハイ・フロリン・アポスト・オータ 氏　青森大学非常勤講師・フリーランス

「動画をつくるときのポイント」
・自転車、スノーボードが好きでやっているから楽しく作れる
・安全で楽しく、周りに迷惑をかけないようにしている
・体を動かすのが好き、自然が好き
・自分が一番楽しくいられる
・そのままの心が写るように作っている

「学生と動画をつくる上でのポイント」
・自分のポジションは？
・自然で自分が楽しんでいるようにしなければならない
・生徒の目がそのままの心が写るようにすることが大事

「課題」
情報発信について
・これからの八甲田はどうなる？
・今の八甲田で大丈夫ですか？
・青森はニセコになる？
　オーストラリア人が経営している
　地元の人が5万円の肉をみる、地元の人が生活できない離れていくような環境
・日本の文化がなくなる
・日本と外国の融合が必要
・大事なところを残す

10年後の八甲田へのおもい
・今のままの青森
・美味しい食べもの
・雪が多いから食べものが美味しい
・日本に元々あった文化を継承していきたい
・温故知新
・自然を守りながら、もっと人々に健康管理や自然と一緒になって欲しい
・自然のことを知ると、自分のことを知る機会になる
・自然から生まれているので、それが自然のこと
・流行りのものではなく
・生き物として自然を忘れればだめ
・自分にできることを発信していきたい

「今後の展望」
具体的な行動として、来年度からはクリエイティブな面で時間を作りたいと思う。仕事よりも自分の勉強に集中する。
　これまで、青森の自然を中心に撮影していたが、自然以外の青森の文化面のことについても考え、青森の仕事やライフスタイルなどを伝えていきたい。
　感謝の気持ちを私なりに何かの形で伝えることを考えている。

●後藤 欣司 氏　モディ株式会社

「ポイント・気をつけたこと」
今回のセクションでは、学生と民間とが協働で動画制作活動をする中で、今後も共に活動をしていけるような関係を築くということを最も重要視しました。

具体的なポイント
・全体を通して主体的でアクティブラーニングであり続けること。生き生きとお互い楽しく協働するためには自主性を重んじること
・主催者側がやりすぎない、物事を決めすぎないこと

「課題」
私はガイド業をしていませんので、マーケターとしての立場から青森県のガイド業の抱えてる課題として感じたこと。
・地域の人材育成と組織づくり
ひとりひとり素晴らしい観光ガイドの方々ですが、青森県内の人には青森の自然や文化の魅力があまり認知されていないように感じます。それこそ県内外の人に知る人ぞ知る青森の魅力となっています。インバウンド対応よりも、県内の人に青森県の自然や文化の魅力を感じられるような体験型の人材育成を幼少時から実施していくことが有効なのではないでしょうか？

～青森の自然体験型観光における現状の課題と今後の展望2～

・人的リソース
ガイド業はマンパワーによる満足度やリピート率の差が非常に大きい。会社組織では利益を出すために旅行客の数や回転率の確保が必要である一方で、個人ガイドは数よりも質に重視する反面金額を高く設定できないでいる（もちろん高付加価値の商品）ケースが見受けれらました。一般的には他業者よりも体力やコミュニケーションスキル、企画力が必要であり何よりも人間力が必要とされるガイド業。また、人の移動を促す動機にもなる商品を扱う人に関してはある程度公共機関などで負担をして、青森県を紹介してその魅力を伝えるガイドの人材育成を一定の水準で行うことが必要なのではないかと感じた。

・移動手段の問題
青森に到着してからの2次交通の不便さよりも、現状動いている２次交通情報が周知に至らないところが不便さを感じる。

・情報共有
ITリテラシーの問題もあるが、他業者や他ガイドと連携した際にプロジェクトの進捗管理、タスク管理、書類の管理、決済の方法などを統一して勉強会などを設けるとより次回以降スムーズに進行すると感じた。

「今後の展望」
観光に関わる人たちの課題や今後の展望などを伺っている中で、小規模で運営しているガイド業の方は、お客様の対応や情報発信などのバックオフィス業務を現場ガイドと兼務することが非常に時間がかかるという現状課題をDMOなど組織体勢でカバーできればと感じました。
　組織で動くにはやはり先立つ資本力や組織としてのマネタイズ が必要ですが、今回の事業で実施した通り、持続可能な観光を目指す人材育成。というテーマで他業種や留学生など多世代と連携をしていきガイドの幅と将来の可能性が少しでも広がるお手伝いをしたいです。組織活動をするにも小規模でガイド業をするにも、情報共有手段は非常に重要だと思いますので、例えば遠隔地のガイドさんとの打ち合わせをウェブ会議にする。資料の共有を共同のクラウドで行うなどITリテラシー向上のお手伝いもできればと思います。

●其田 知志 氏　八甲田山酸ヶ湯ツアーガイド

「八甲田山おすすめ撮影ポイント」
　八甲田ロープウェイを降りてすぐに樹氷原（スノーモンスター）があり、手軽に見学ができる。ロープウェイで1300mまで昇れるので身近にBCを楽しむ環境がある。
　厳冬期には－10度以下になるため、天候条件によってはダイヤモンドダストが見れることがあるなど、厳しくも美しい自然の景色を見られるところ。

「課題」
情報がそれぞればらばらに発信されているので、正確な情報がお客様にとって把握しづらいと感じる。
青森県はアクセスなどの問題があると言われているが、実際は空港や駅から八甲田までのアクセスは非常に良好である。その点も動画など情報発信をしていくべきだと感じる。

「今後の展望」
　個人的には当初の目的通り、青森に必要なのは現場をより熟知した観光案内「DMO」組織。第３タームでも報告した通り、DMO組織での情報発信の一元化や信頼性の向上を徹底して行きたい。
　情報発信などにおいては今回の事業での「人材育成」や「他業種との連携」を今後も進めて行きたい。

～青森の自然体験型観光における現状の課題と今後の展望3～

●花田 カズオ 氏　BBB AOMORI TOUR GUIDES

「課題・展望ポイント」

今回、学生と民間とが協働で動画制作活動をする上で具体的に気をつけたこと。

●雪上を走るという、非日常的な体験を味わって頂きたいという思いで、ファットバイク体験を提供しています。

●スノーライディングをもっと広めたい思いもありますが、身近な場所でフリーに乗れるところが少ないため、ジレンマを感じています。

●雪上のアクティビティとして危険度もそれなりにあるので、安全面をいかに確立するか。その上でエンターテインメント性をいかに演出するか、が課題になると思います。

・YouTube動画に掲載しているターゲットとエリアでもっと精査しないと、満足度が上がらないのではないか。
・今シーズンのニーズとして、歴史・文化と自然をファットバイクで楽しむには、林道コースをつくれるとよいのではないか。

・ガンガン走る人は対象ではない。
・自分がやっているのは競技ではない。
・ワンコインのママチャリで一人で街歩きできるのが事実。
・マップに載っていない情報っだったり、スペシャルな情報を提案している。

主役はお客さんなので、自分は（相手によると思いますが）相手が何をしたいのかを引き出そうとしている。

●戸澤 依香子 氏　「あおもり和ハーブの会」副代表・和ハーブ協会インストラクター

「現状課題」

1．青森県自体のイメージが他県と比較するとまだ薄く、自然体験観光をしようと考えたときに選んでもらえていない

青森県について、私の知人で県外からお越しになるお客様から出る言葉としては以下のような発言が圧倒的に多いです。「十分楽しめるコンテンツがあるのに、普段情報が入ってこない」「アクセスが悪いイメージがあって、知り合いがいなければ来ることもなかった」「海外旅行の代替として来れるポテンシャルがあるが（海外並みに高速道路を含め道が混まなくて車移動は快適）、それを知らなかった」「海と山がこんなに近くて、両方を楽しめる地域だと知らなかった」

とにかく北へ行こうを考えたときに北海道のイメージが強く、東北といっても宮城県までという方が、関東圏もですが、関西や中部、九州地方在住の方には結構言われました。

かくいう私自身も青森県に戻ってこなければ、ここまで充実した自然環境を楽しめる企画にあふれた地域だとは認識できていませんでした。
アクセスの不利さから、どうしても関東圏に住んでいたころは青森に自ら行こうとも考えませんでした。
これは客観的に申し上げると、情報流通量が不足していることが課題だと感じます。

自然体験観光はまず日本の中でもそこを選んで来てもらわないと始まらないと考えます。そのためにも、まずそのよさを知ってもらう努力を県全体で一丸となって取り組んでいかれることが最重要のように感じます。
昔と違い、ネットでの情報提供も以前よりは楽になっているので、どんどん情報を外に出し、青森の自然体験観光のよき理解者、ファンを増やしていくことが肝要と考えます。

～青森の自然体験型観光における現状の課題と今後の展望４～

「現状課題」

２．接客対応とコミュニケーション能力について

私自身、県内で自然の中での様々なアクティビティに参加したことがありますが、接客対応やコミュニケーション能力に長けている方とそれが苦手で、他人にその魅力を言葉を含め伝えるのが苦手な方とがいらっしゃるかと思います。

後者の方は県内にずっといらっしゃる方に多いのですが、ご自身の感覚と参加者の感覚の差異に気付かない方もいるように感じます。

例えば、都会に生まれ育ち、普段平面の段差のない場所しかほぼ歩くことのない参加者は山の段差のある狭い道ではバランスが取れずに危ない方や、山での持ち物についての十分な知識を持たず、虫よけやケガの対策がない状態で主催者側が全部やってくれるであろうという想定で参加してしまう方等が自然体験型観光に参加される可能性があるかと思われますが、個人客相手の案内者の方に、そのあたりのケアがなく、みんな同等に動けるものとして参加者が疲弊しても案内を続けている方もこれまで数人いらっしゃいました。

ある程度はやむを得ないことではありますが、もう少しお客様に寄り添い、参加者とコミュニケーションをとりながら、無理なく催行することが重要であると感じます。また、実際の参加者に対してどんな人が来る可能性があって、どういった危険性があるのか、もう少しリスクも含め、こういった事業領域に携わる方々への教育・指導が必要だと感じます。

３．自然環境変動リスクについて

今年が特に顕著ですが、暖冬、積雪量が非常に少ない年が出てきており、山スキーやスノーシュー等の冬山の自然体験の実施が難しいときがあること、温かさで植物が春が来たと思ってしまい、真冬の一時の暖かさで本来春先に見られる花が咲いてしまったり、山菜等が出てきてしまう現象があります。

昨今は山菜や貴重な植物をはじめ、無知な方々が山に入り込むことにより取りつくしてしまい、本来あったはずの植物が根絶やしになっている光景も県内で見られます。

山菜が都市圏で高く売れるからと、個人の山に勝手に入山し、山菜を採りつくす業者が後を絶たないことも耳にします。

本来企画時に想定していた自然環境が、実施するときには存在しない可能性が今後も増えていくと想定されます。

自然体験型観光は自然環境あってのものですが、その環境が実際に変動していること、またその環境を人自体が破壊していることによる影響、それらを少しでも食い止めるべく参加者への啓蒙も考慮した上で、こういった観光を企画していくのがよいのではないかと感じています。

「今後の展望」

４．価値を持った体験学習型観光

１～３の課題はあるものの、青森県は手つかずの豊かな自然環境にも恵まれており、海も山も近く、コンテンツ力としては非常によいものがあるかと存じます。また、新幹線や飛行機等により昔よりも都心部からのアクセスも良くなり、人もしっかりおもてなしの心をもって接客されている方や旅行客の方に声掛けして、情に厚い人が多いと人の面でも高評価を受けている話も耳にすることがあります。

これまでのものが充実した時代の次に来るのは、サービスや目に見えない部分で価値あるものだと考えます。

前述の意味でも青森の自然体験型観光は評価すべき点が多々あり、体験を通しての学習型観光として明確なテーマを持たせることによってより広がりをみせていくのではないかと思います。

【掲載記事】

日 東奥日報 2019年（令和元年）12月25日 水曜日

青森の冬 世界へ紹介

訪日外国人旅企画に一役

青森大留学生ら 八甲田で動画撮影、配信へ

青森 青森大学の留学生6人と日本人学生3人が、訪日外国人向けの体験型旅行商品の企画に役立ててもらおうと、本県の冬の魅力を紹介する映像を制作している。21～24の4日間、八甲田山系周辺で雪遊びを体験し、その様子を撮影した。雪のブロックを積んだ北極圏特有の住居「イグルー」作りやスノーシューを履いた山歩きなど本県の自然を生かした多彩な冬の遊びを紹介する予定で、来年1月末ごろに動画投稿サイト「ユーチューブ」で映像を配信する予定。（兼平昌寛）

佐々木センター長（左から4人目）の指導で、イグルーを作る学生たちと、その様子を撮影する留学生（右端）

青森大学観光文化研究センターの事業として実施。中国、台湾、韓国、ネパールの留学生が参加した。

23日は、学生らが酸ケ湯温泉郷で、佐々木豊志センター長から指導を受けながら、イグルーを制作。雪を集めて踏み固め、スコップや雪専用のノコギリなどを使ってブロック状に切り出し、慎重に積み上げていき、その場面を学生やスタッフが撮影した。

また、学生らが雪上にハート形に横たわり、撮影中のドローンに「アイラブ青森」と叫んだ。

期間中、学生たちは雪上でのビーチフラッグをイメージした「スノーフラッグ」や山歩き、極太タイヤの自転車で坂を下る「スノーサイクリング」も体験した。

ともに台湾からの留学生で、経営学部2年のヨウ・コクユウさんは「台湾にいたときは雪を見たことがなかった。雪遊びは自分でも楽しいし、台湾人にとっても楽しいと思う」、経営学部3年のショウ・フトクさんは「青森県の魅力を海外の人に発信できるようにしたい」と語った。

2019年（令和元年）12月25日（水）
東奥日報 朝刊

体験型観光人材育成ツアー参加者を募集

青森大研究センター

青森大学観光文化研究センター（センター長・佐々木豊志総合経営学部教授）は25日から行う体験型観光商品企画担当者向けツアーの参加者を募集している。

近年の体験型観光ニーズの高まりと外国人観光客急増を受け、2017年度から観光庁と連携して取り組んでいる観光人材育成事業の一環。

第1期間の25～27日は水をテーマに十和田湖、奥入瀬渓流、浅虫でカヌーなどを体験してもらう。第2期間の10月12～14日は同大学ヒュッチ周辺で歴史、健康をテーマに、縄文から伝わる先人の知恵や身近にある薬草などについて学ぶ。第3期間の12月14～15日は冬山の楽しさとその中に潜む危険を学習する。

各期間とも有料。一般の人も参加できる。佐々木センター長は「青森の自然が観光商品になることを知ってほしい」と語っている。

申し込み、問い合わせは同センター長（電話090・2739・7455）へ。（兼平昌寛）

2019年（令和元年）9月19日（木）
東奥日報 朝刊

青森

歴史や健康 先人に学ぶ

青森大学観光文化センターがセミナー

青森大学観光文化研究センター（センター長・佐々木豊志総合経営学部教授）はこのほど3日間にわたり、青森市幸畑の同大学ヒュッチ周辺で、歴史や健康をテーマに、縄文から伝わる先人の知恵や身近にある薬草などについて学ぶセミナーを行った。参加者たちは縄文時代の衣食住を体験したり、自生する植物の効能を学んだりしながら、楽しく本県の魅力を探った。

さまざまな種類の生薬を手に取る参加者

同センターが9月から行っている体験型観光商品企画担当者向けセミナーの第2弾として実施した。

初日は9人が参加。同大学薬学部の大越崇実加准教授は昔から言い伝えなどで良いとされている「民間薬」と、2種類以上の生薬を組み合わせて作る医薬品「漢方薬」の違いや、カッコン、カンゾウ、シャクヤク、サンショウなどの生薬について説明した。

本県で自生・栽培している植物も多く、大越准教授は、生薬をキーワードに本県の魅力を発信できるのではないかと提案した。

同日はほかに青森市教委文化財課の児玉大成主幹が縄文時代の食生活、佐々木センター長が森や命、SDGs（持続可能な開発目標）をテーマに講演した。参加した青森市の岡村正彦さん（51）は「本県でもカンゾウやサンショウを栽培しており、本県が生薬の産地になりうるのではないか」と語った。（兼平昌寛）

2019年（令和元年）10月28日（月）東奥日報 朝刊

【青森の自然体験型観光における現状の課題と今後の展望】

これまで講座を積み重ねてきて、具体的な今後の取り組み、そして観光産業のあるべき可能性は次のように考えています。

①「自然由来の素材を活かした体験型観光」に特化したDMOを創設する。

これまでの人材を生かして、従来の体験型観光に新たな体験型観光商品を開発し、普及・受け入れを促進する地域事業もしくは仕組みを興す。

②〝イグルー王国あおもり〟として新しい観光イメージを創造する。

近年県内各地では雪を利用したイベントが企画されています。さらに雪を全面的に打ち出し雪が豊富な地域であることをポジティブ捉え、例えば、酸ヶ湯温泉にイグルー村を設置し、イグルーづくりイベントを実施し、宿泊施設と連携した企画を試みる。

③この地域の観光がつながる「地域循環共生圏」の創造。

SDGsをベースにあらゆるツーリズムの可能性を模索して、これまでにないセクターを超えた連携による観光産業を構成する。短命県青森を返上するヘルスツーリズム視点から薬草、野草、ハーブ等を活かしたコンテンツ、サスティナブルツーリズムの視点から、持続可能な社会を考え、知り、アクションを起こすことができる体験型観光商品の開発を進める。　青森市は縄文文化の世界遺産登録へ向けて取り組んでいます。地域の資源としての歴史・文化・風土が持つ価値を再認識するツーリズムを創出する。

今回の新型コロナウイルスの影響により、今後のインバウンドの動向にも変化が及ぶと思われます。環境意識が高く、地球にとって持続可能な体験型コンテンツのニーズが高まってくることを想定し、青森・東北ならではというオリジナリティがさらに不可欠になってきます。

インバウンドだけでなく、国内、県内、地域住民にとっても魅力ある体験プログラムを創出する工夫が必要になります。

そのための今後の青森大学観光文化研究センターの役割は、地域の観光産業の新たな事業の展開のために各関連セクターをつなぎ、具体的なアクションを進めるハブ的機能を担うことにあります。

令和2年3月

青森大学 観光文化研究センター
センター長 佐々木 豊志

青森大学 観光文化研究センター 主催
国土交通省 観光庁 後援

令和元年度 産官学連携による観光産業の中核人材育成・強化事業
体験型観光商品を企画・実施できる中核人材の育成を目指す

体験型観光商品企画担当者向けセミナー 報告書

令和2年3月

発　行　青森大学 観光文化研究センター
〒030－0943 青森県青森市幸畑二丁目３番1号
発行人　佐々木 豊志 青森大学観光文化研究センター長
編　集　後藤 欣司 モディ株式会社
楠本 ゆり 特定非営利活動法人くりこま高原・地球の暮らしと自然教育研究所
印　刷　株式会社こがわ

※無断転載を禁じます